江戸名所図会　三

○魚籃観音の古筆

[illegible]

○象牙寺 有口心光院[illegible]女の古墓

[illegible]

ル 4
3218
3

三縁山増上寺 廣度院と號し關東浄家の總本寺十八檀林の冠首にして盛大の佛域なり百一代 後小松院の御願にして

開山ハ大蓮社酉誉上人中興ハ普光觀智國師なり

十八檀林ハ武總常野等に存在を阿弥陀佛六八本願の中第十八を以て最勝とする所因を 抑當家 御称号松平氏の松や千歳を閲し能雪霜にあてられも又君子の操ありて志りを太夫の封を受く其守や木公は従ふ細にわのときハ十八公なり依て是を弥陀の十八願にかくらもあひ精舎十八區を建て永く栴檀林とし多く英才を育しく法運無窮の謀を設けられひ御子孫永く安うんする八霜雪の後松樹繁茂もろめくとの盛慮に従ひ源家の御代を浄家の白旗流義により千代万代までも守護し奉るべき急を表しあふありとぞ以上浄宗護國篇新著聞集等の意を採摘も

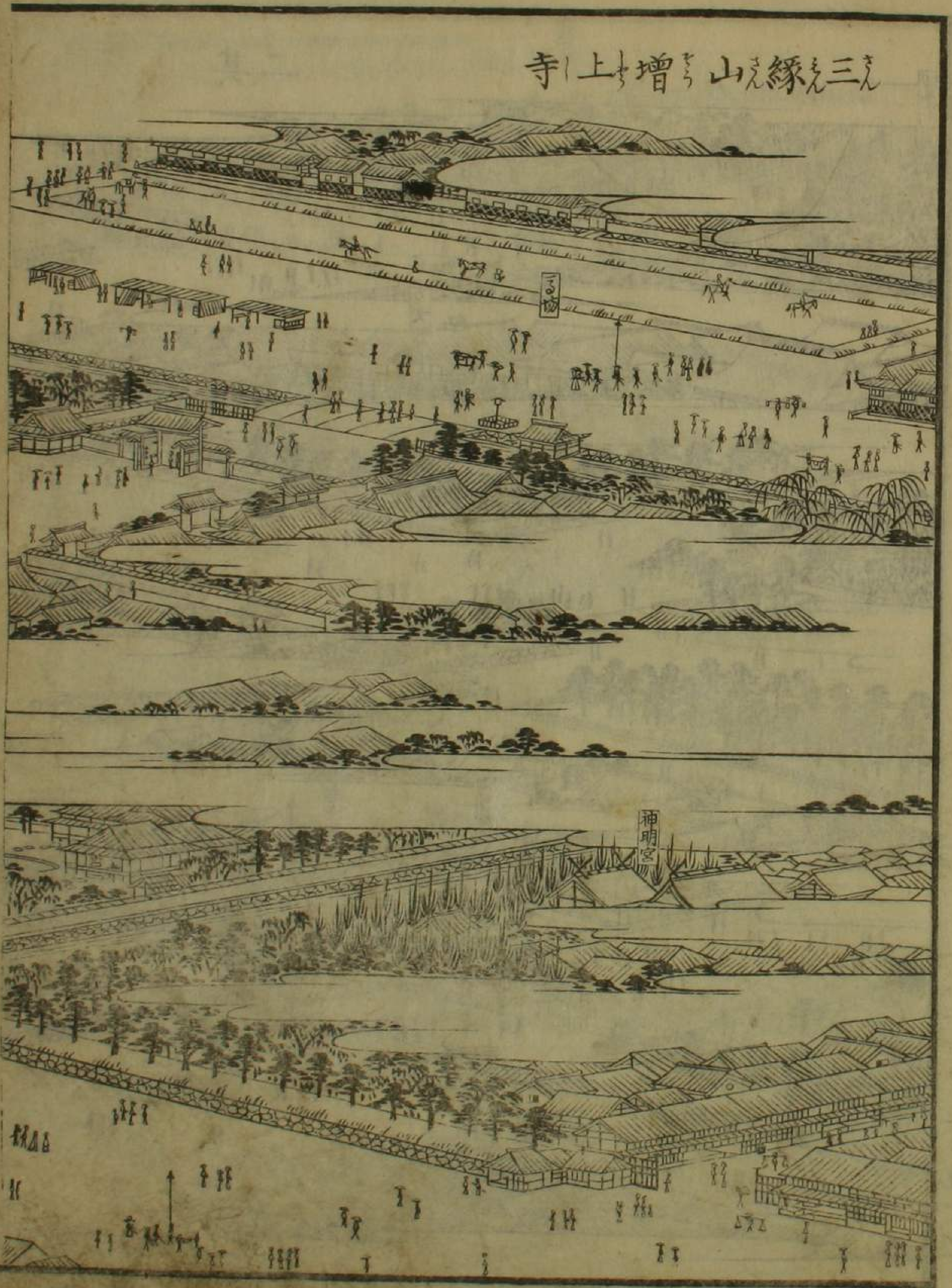
本堂本尊阿彌陀如来 恵心僧都の作中にも座像御長四尺もろもあり或云佛工運慶の作なりと

額 三縁山 廓山上人真蹟 上人ハ當寺第十三世なり甲州の産にして高坂彈正の子なりとのへわり

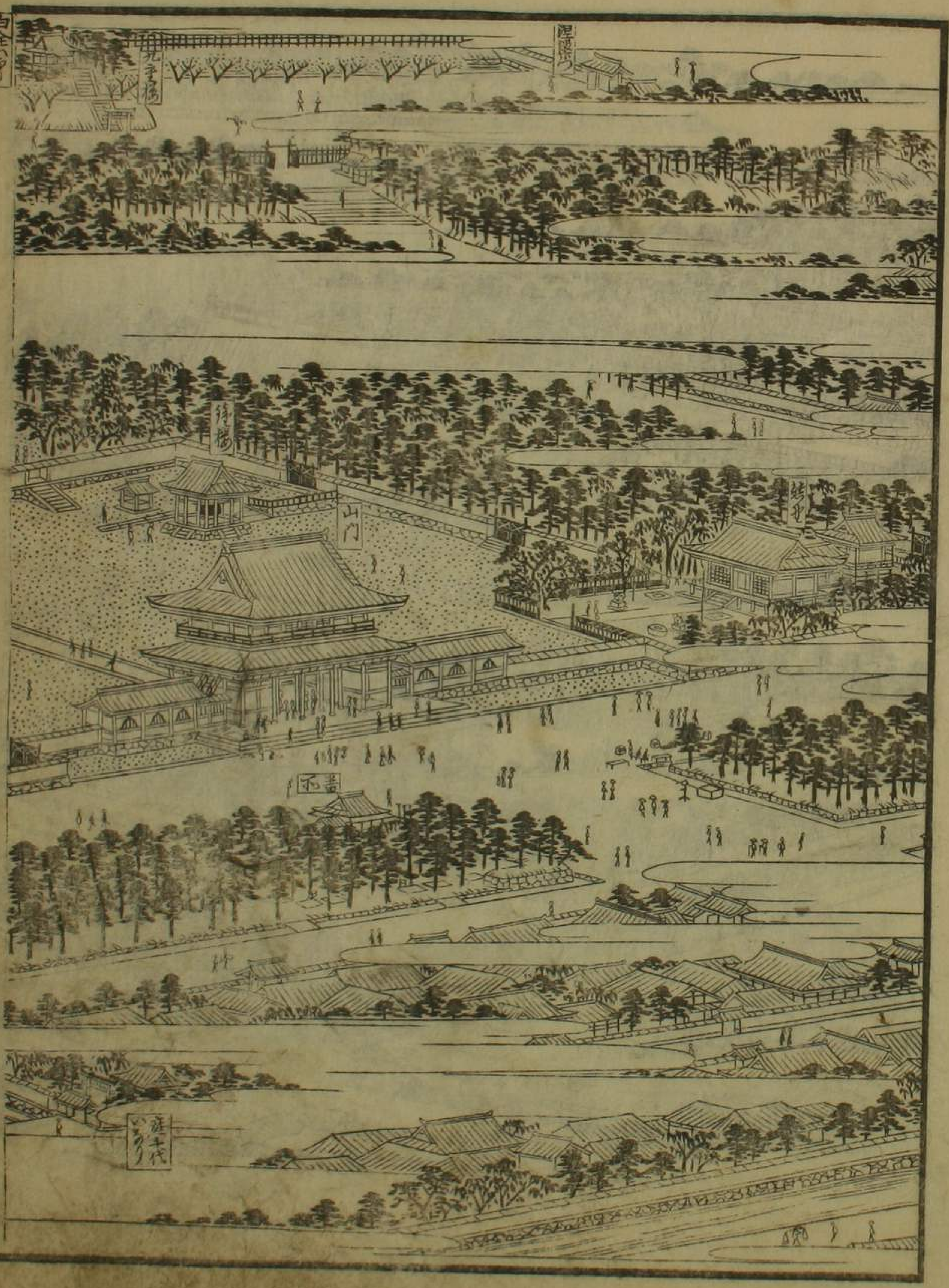
御經藏 本堂の前左の方塀の中にあり或人云ここに納る所の一切蔵経ハ宋板にして其先豆州修善寺にありて平政子の寄附なりとぞ後彦坂九兵衛尉 台命を奉し當山にうつさるとなり 蘭岡沾涼云昔ハ方丈ありしを寛永九年照誉上人了学大和尚 経蔵を創立しるるとなり今ハ官造に列を

開山堂 同所左になし當寺開山以下累世大僧正の尊像およひ靈牌等を置きへり

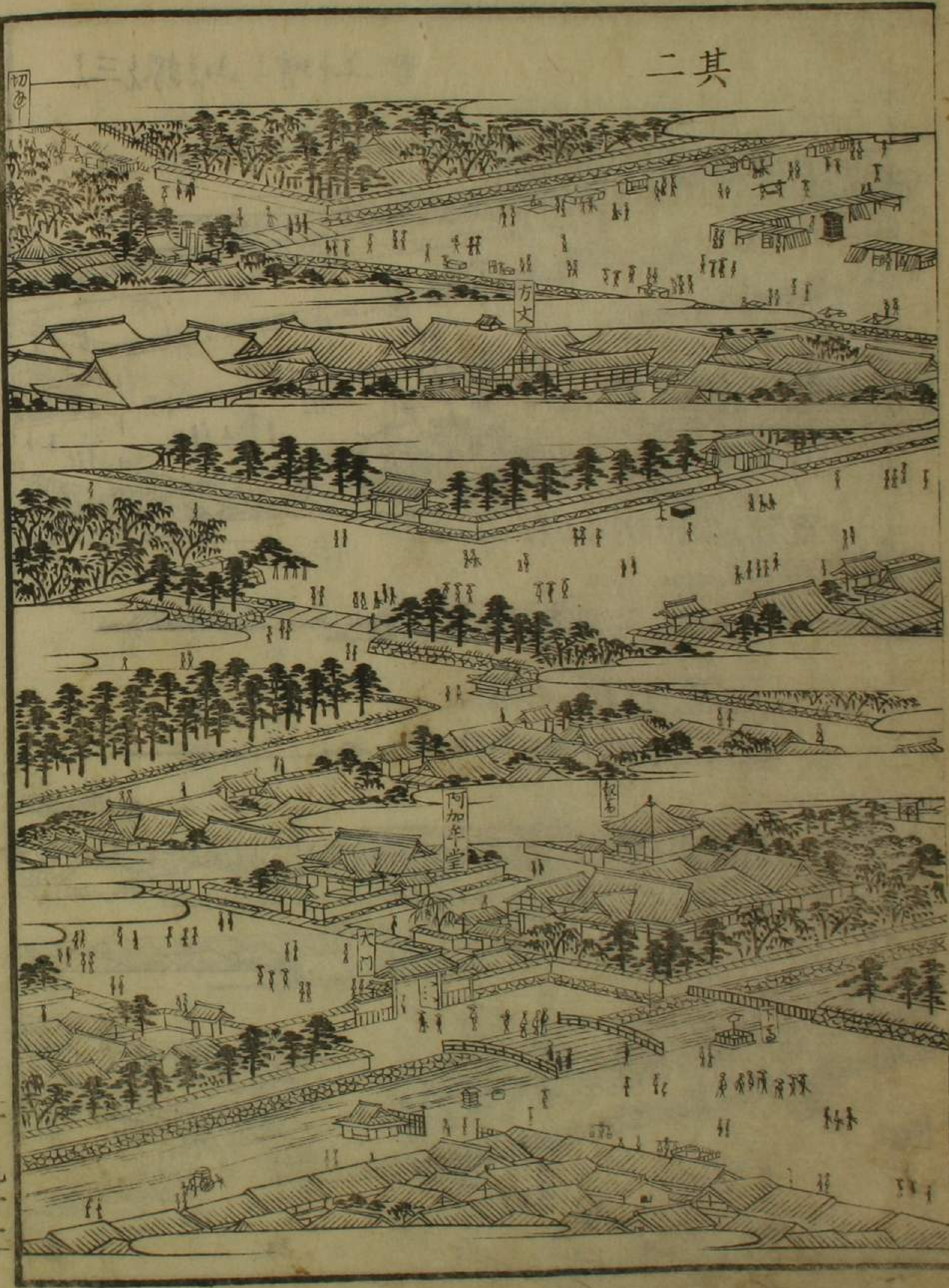
昭和九年七月六日購求
門 九 3218 3



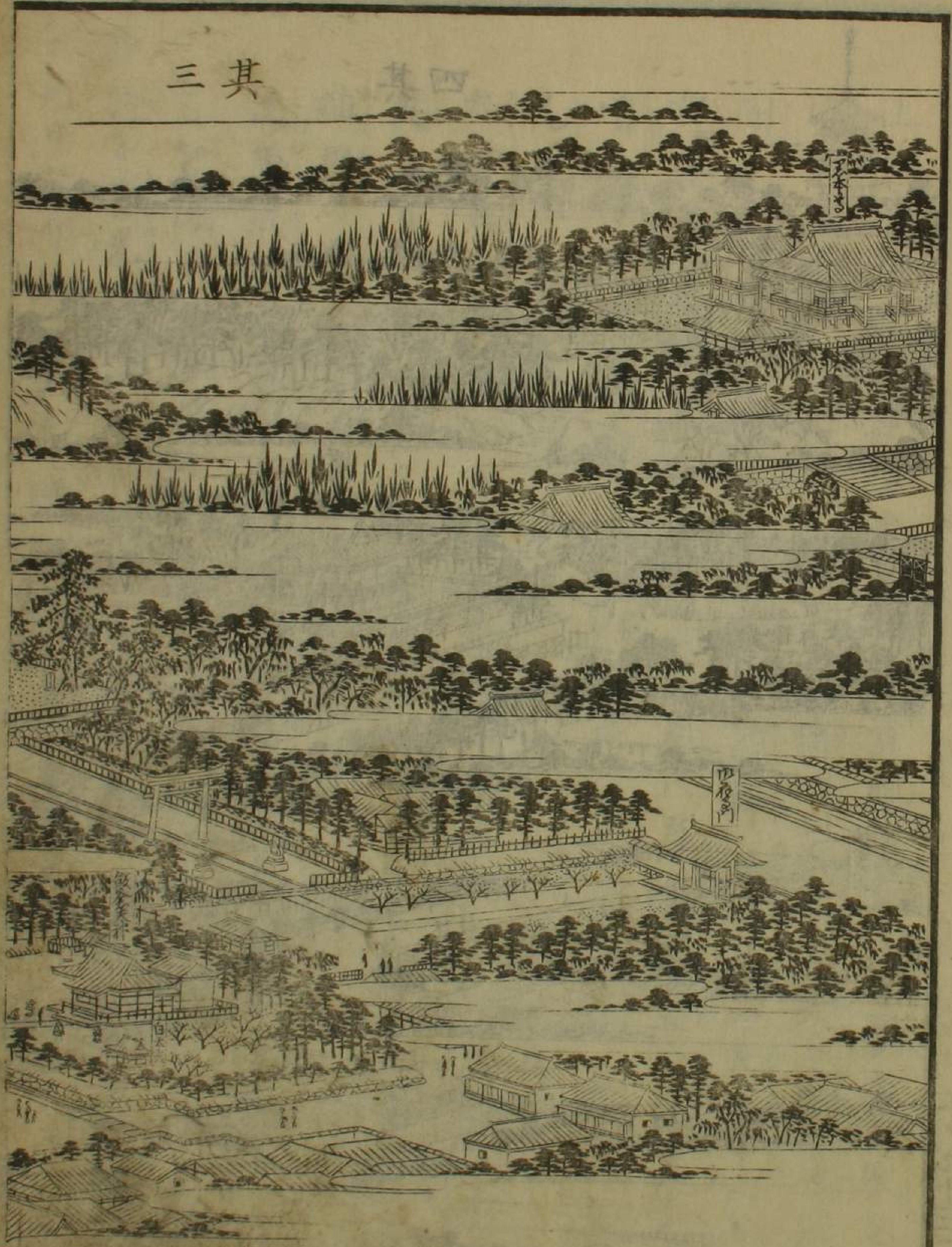
開山酉誉上人諱ハ聖聰大蓮社と号す 鎮西正統第八世の祖とす 貞治五年七月十日 千葉系図貞治二年六月三日とあり 北總の千葉に生る父ハ千葉陸奥守氏胤母ハ新田氏なり童名を徳壽丸と云 一書ニ徳千代とあり 加冠して胤明と称す出離の志深く釋典を慕ふ九歳にして遂に同國千葉寺に入て落飾し初て密教を学ひ後同公に投帰して浄宗に入智道倍熾なり其後武州豊島郡江戸貝塚の光明寺に住せしる 今の増上寺是なり江戸名勝志に云増上寺の旧地ハ糀町一丁目越後やしきと云辺なりとあり 此寺始ハ真言瑜伽の道場なりしか竟に光明寺を改て三縁山増上寺と号し宗風を轉して浄業の精舎とす永享十二年庚申七月十八日寂す歳七十五臘六十七 東國高僧傳に應永二十四年に寂す壽詳ならすとあり 中興開山勅賜普光観智國師諱ハ存應字ハ慈昌貞蓮社源誉上人と号す 平山左衛門尉季重の後裔なり 系図に云姓ハ由木又ハ金吾校尉源利重云々 傳燈 天文十三年 護国篇十五年に作る 武州由木に生る始衣を片山の宝臺寺に摳ひ十八歳感誉

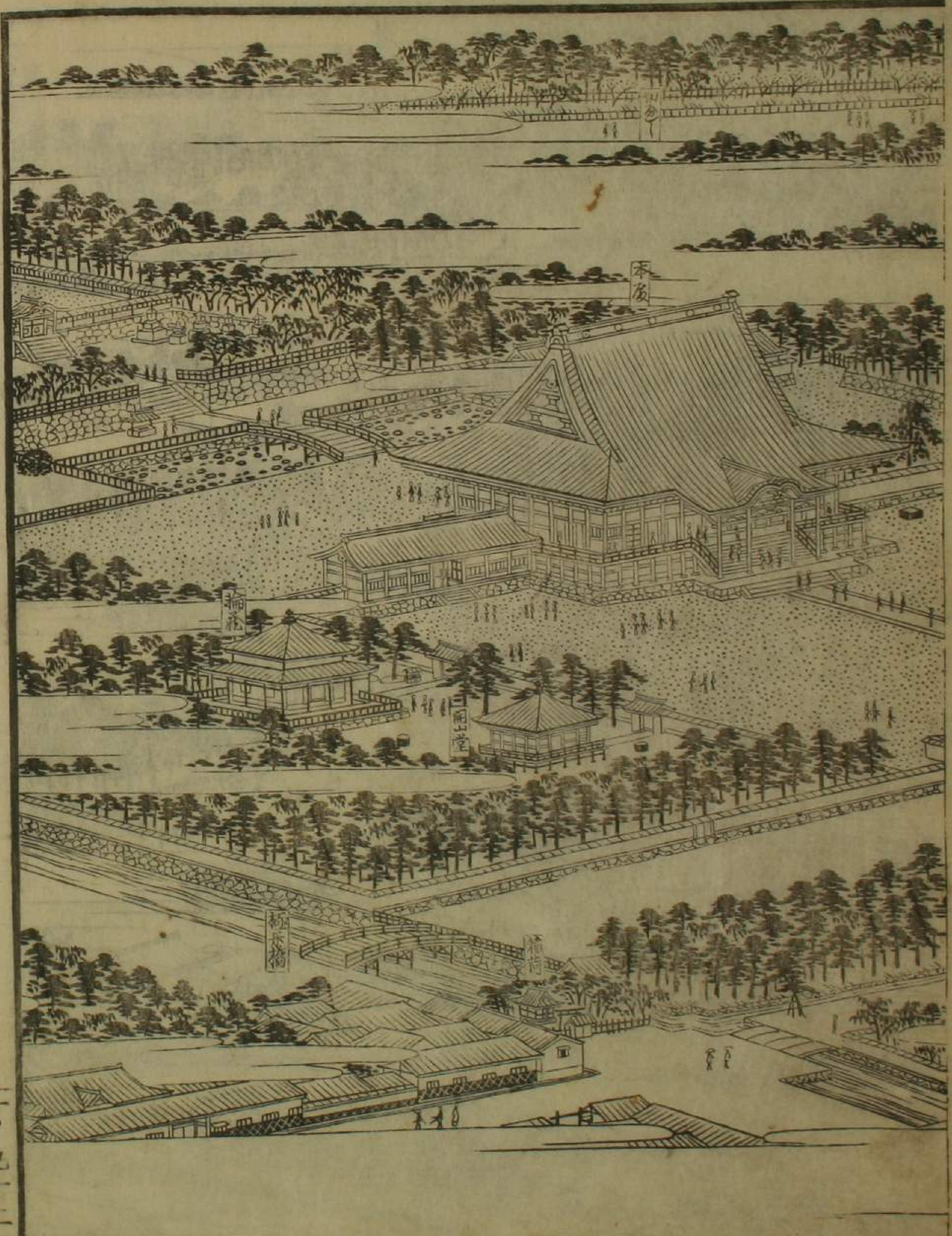


其二



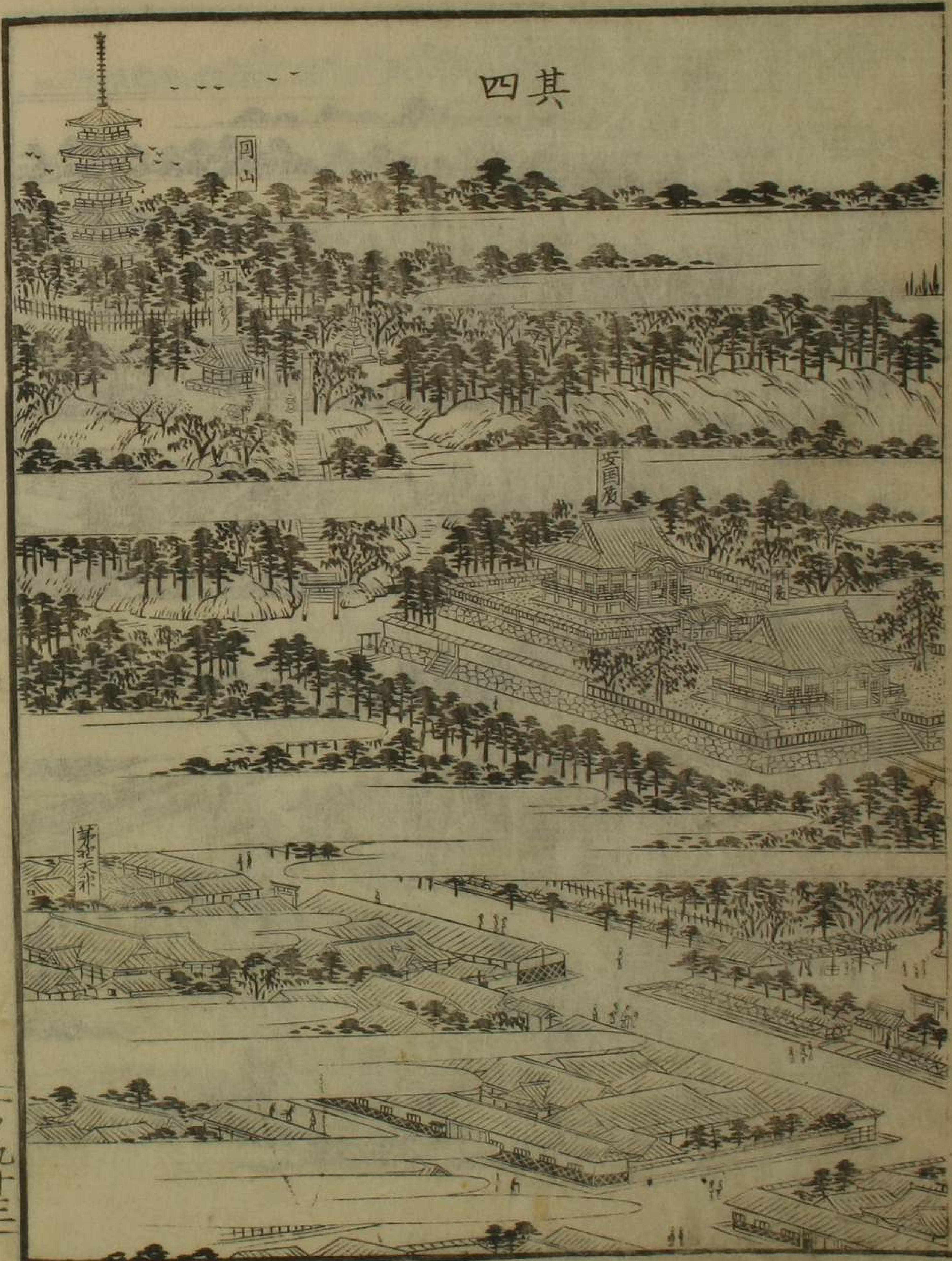
其三



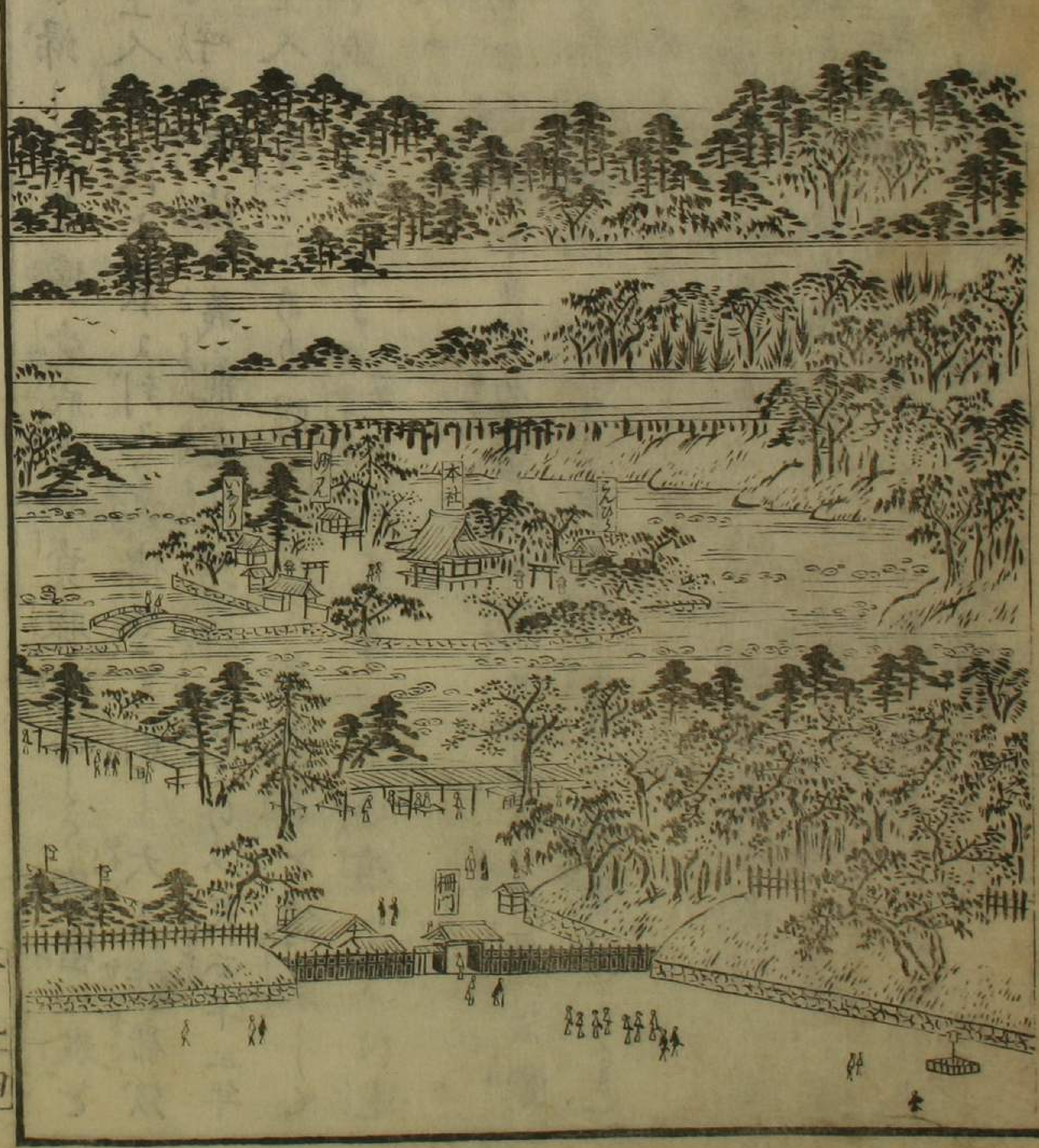


上人に帰して登壇受戒す天資聰悟にして顯密の教を
究む上人没後上簑に到りて長傳寺を創し大に法席を
開く人呼て教海の義龍蓮苑の祥鳳といふ天正十三年
雲誉上人の會下にあり同十七年八月璽書を傳兼して
増上寺第十二世となる（當寺第十二世なり）同十八年天下安靖なるに逮
んて大に
大神君の眷顧をかふむり屢營中に請せられて法要を聽
受したまひ崇信他に異なり竟に増上寺を修營せしめ
植福の地となしたまへり又
後陽成帝師を宮内に徴して道を問たまふ盛に浄教の深
旨を陳す　叡感ありて褒章を加へ新に宸翰を染たまひ
特に普光觀智國師の號を賜ふ時に慶長十五年七月十
九日なり元和六年師微恙をかゝる嗣君

其四



増上寺山内
芙蓉洲弁天社
池中ニ蓮多し



大将軍親ら臨むで恙くも疾を問せ給ふ十一月二日諸徒に遺誡し辭世の偈を書しく曰く佛話提撕心頭塵未後一句但稱佛と筆を抛て端座合掌し佛号を唱へく化を世壽七十有七僧臘六十護國篇世壽八十とありいづれか是なる事をしらず門葉甡々として学徒流に浴を撰述する所論義決擇集阿弥陀経直譚等大に世に行はる 傳燈系図等に出つ 以上浄土高僧傳浄宗護國篇

大銅鐘 本堂の右の方にあり鐘の厚さ尺余口の渡り五尺八寸その外ゑのさ一丈程あり銘曰新鋳洪鐘掛三縁山増上寺之樓二十六世森誉上人歴天大和尚延宝元癸丑年十一月十四日神谷長五郎平直重須田次郎太郎源祇寛鋳工椎名伊豫吉寛云々其聲洪大にして遠く百里に聞ゆ一撞の間の響尤長くしく行人一里を歴るとくに一里鐘と称せ況ん後ひく當國熊谷の辺に聞ゆるのありかしこは江戸より十六里を越隔つ又安房上総へも聞ゆるといへり

熊野三所權現祠 同所にあり則當寺の鎮守ゆして護法の神と称せ

黒本尊堂 本堂の後蓮池より奥の方にあり本尊阿弥陀如来の像は恵心僧都の作なり御長二尺六寸相向圓備ありしく生身の佛體に向ふかし世人呼んで黒本尊と称せり多くの星霜を歴く金泥をことく変して黒色となる故に此称ありとも或ハ源九郎義経守持せる本

尊は九郎か守るといふの意なりとも始参州桑子の明眼寺にありしを某の邑の調をもく寺へ来り此靈像をぬかひく常に念持佛とありしかが當寺に遷し奉るとあり元禄八年増上寺御修営の時桂昌一位尼公重く佛龕を新にし宝帳玉扉構飾精巧を極むと 以上浄宗護國篇に載る所也 毎歳正月十六日四月八日同十七日諸人に参詣する事をゆるさる

三門 元和九年癸亥御建立或云八年なりと樓上に釋迦文殊普賢十六阿羅漢等の本像を置正月七月の十六日二月八月の彼岸の中日又二月十五日四月八日登樓をゆるさる

安國殿 本堂構の外南の方にあり四月十七日ハ御祭礼ありて参拝を許さる尤不詣せる人多し来由ハ其憚あるを以て是を略す御別当を安立院と号す

五層塔 同所御佛殿の地蒼林の中にあり酒井雅楽侯の建立なりとぞ

涅槃石 同所にあり御影物師吉岡豊前作なりと

羅漢石とも号く

曼荼羅石 同所にあり後藤祐乗得乗の作之とぞ来迎石とも名つく

鷹門 同所にあり

極楽橋 同所前の溝に架せる所の石橋をいふ

宗廟 御當家御代々の御霊屋なり当寺院中より御別当を務む

御常念佛堂 涅槃門の方にあり恵照律院と号す浄土律ゆして當山の別院なり横蓮社継誉心岩上人開基す同巻赤羽心光院の条下に詳なり當院に上人真筆の涅槃像の印板あり有信の輩に授与す他の図に異なり

性壽庵 方丈の後の方にあり尾州清須城主松平薩摩守忠吉の霊牌を置故に俗に薩摩堂とよべり側に小笠原監物を始として殉死

五人の石塔あり拂の井といふも同所南の坂通りにある名泉なり

飯倉天満宮 天神谷にあり當山の地主神なり昔飯倉の神明も此地にあり しかるを社地に梅樹を多く栽て二月の頃一時の荘観たり 宝松院別當を

茅野天満宮 同所南の方松林院にあり 神像ハ菅神の直作とそ

圓光東漸大師 明定院前大僧正定月

舊跡 山下谷明定院にあり是も當山の別院なり 大和尚明和七年に建立せる六間四面の堂にして戒檀造なり

圓座松 同所にあり 圓山 同所にあり

辨財天祠 赤羽門の内蓮池の中島にあり 本尊ハ智證大師の作なり

右大将頼朝卿経会の法花堂に安置ありしを星霜を経て後観智國師感得ありて當寺宝庫に納めありしを貞享二年生誉霊玄上人此所に一宇を建て一山の鎮守とあがめしと 宝珠院別當より中島を芙蓉洲と号く

此所門より外ハ赤羽ゆしく品川への街道なり

子聖權現社 山下谷にあり 清林院別當

産千代稲荷 觀智院にあり 昔ハ普光院と号せしとなり當寺八合蓮社明誉檀通上人の旧跡なりといへり

阿加牟堂 東の大門の通り常照院にあり 常念佛の道場なり

大門 東に向ふ當山の總門なり 外に下馬札を建らる

御成門 北の方馬場に相對す此所もと下馬札あり

涅槃門 切通の上にあり 涅槃像あるゆゑなるべし

慧照院に 柵門 山下谷より赤羽へ通る 赤羽門ともいへり

當寺旧古を貝塚の地にありて光明寺と號せし真言瑜伽の密場なりしを後小松院の御願に依て草創ありし

古刹なりしに至徳二年酉誉上人移り住せるの後竟に了誉上人 傳通院三ヶ月 上人のすゑなり の徳化に歸し寺を改めて三縁山増上寺と號し宗風を轉して浄刹とせり 事跡合考に出せる三縁山歴代系譜に云く當寺草創之地者貝塚 今糀町邊中頃移于日比谷邊後慶長初移于芝云々日比谷より芝へ移りしハ慶長三年戊戌八月なり 武徳編年集成に慶長三年戊戌去る天正十八年辛卯平川口へ移されし増上寺を芝の地にうつさるとあり 平川日比谷ハ古への地を接して混しそいふ

東照大神君 天正十八年始て江戸の大城に入らせ給ふとき州民鼓腹し老幼相携て道路に拝迎し奉る幸に寺門の前路を通御ありしより觀智國師も是を拝せんとして寺前にあり 是則日比谷の地にありてのことなり 時に師の道貌雄毅尋常ならざるを見そなはしまし其名を問せられ乃寺に入て憩ひ給ひ其後當寺を以て植福の地となしたまひ永く師檀の御契約ありて御崇敬あつく屢師を営中に請せられ法要を聴受なしたまひ待遇殊に礼を殊にし是を親王に比せられ師をして乗輿して殿階に昇ることを得せしむ以て永式とす今に至て歴代の住持咸この寵をうく 時に寺境隘狭なりしかば

大城に接近そ是乃ち此谷に在しぬのすへ依て今の地に移さまし大に資財を
喜捨し殿堂房室に至るまで悉く營建しまひ最宏壯の大梵
刹となる事跡合考に慶長十年乙巳本堂回廊等に造營ありて大伽藍と成云々於是淨家の宗敎一時に
勃興し念佛の聲天下に洋々たり以上淨宗護國篇ニ出ヅ慶長十年一朝門前の老翁師に謁て云く
今夜祥夢を感ぜ師微笑して云く你其夢を鬻け吾買んとて靑銅二十
足を卑ふ既にして翁云く增上寺軒端の寄木繁るまん師曰く吉讖なり愼て
人に語ることなかれと果して翌日伽藍營復の命ありて竟に宏構鉅材天下に
壯觀となりし由淨土高僧傳に見へり
抑當山は關東淨刹の冠首にして龍象の聚る所實に靈山
會上布金紺園にも比すべくして數百戶の学寮は疊々として
軒端を輾て支院は三十餘宇甍々として甍を連ね三千
餘の大衆八常におこたらず集る中にも能化は一代の法藏を胸間に
貯へ所化は十二の敎文を眼裡に晒せしも三心即一の窓の前
にも五念四修の月を弄び事理倶頓の林の中にも実報受
用の花を詠す佛閣の莊麗なる七宝莊嚴の淨土も又此を

去る事遠かすとを思ひまる

御忌參 正月廿五日 涅槃會 二月十五日 誕生會 四月八日 開山忌 七月十八日に修行す一山惣出仕並に近在の末寺より出て大法會を修せり

十夜法會 十月六日より同十五日迄修行す

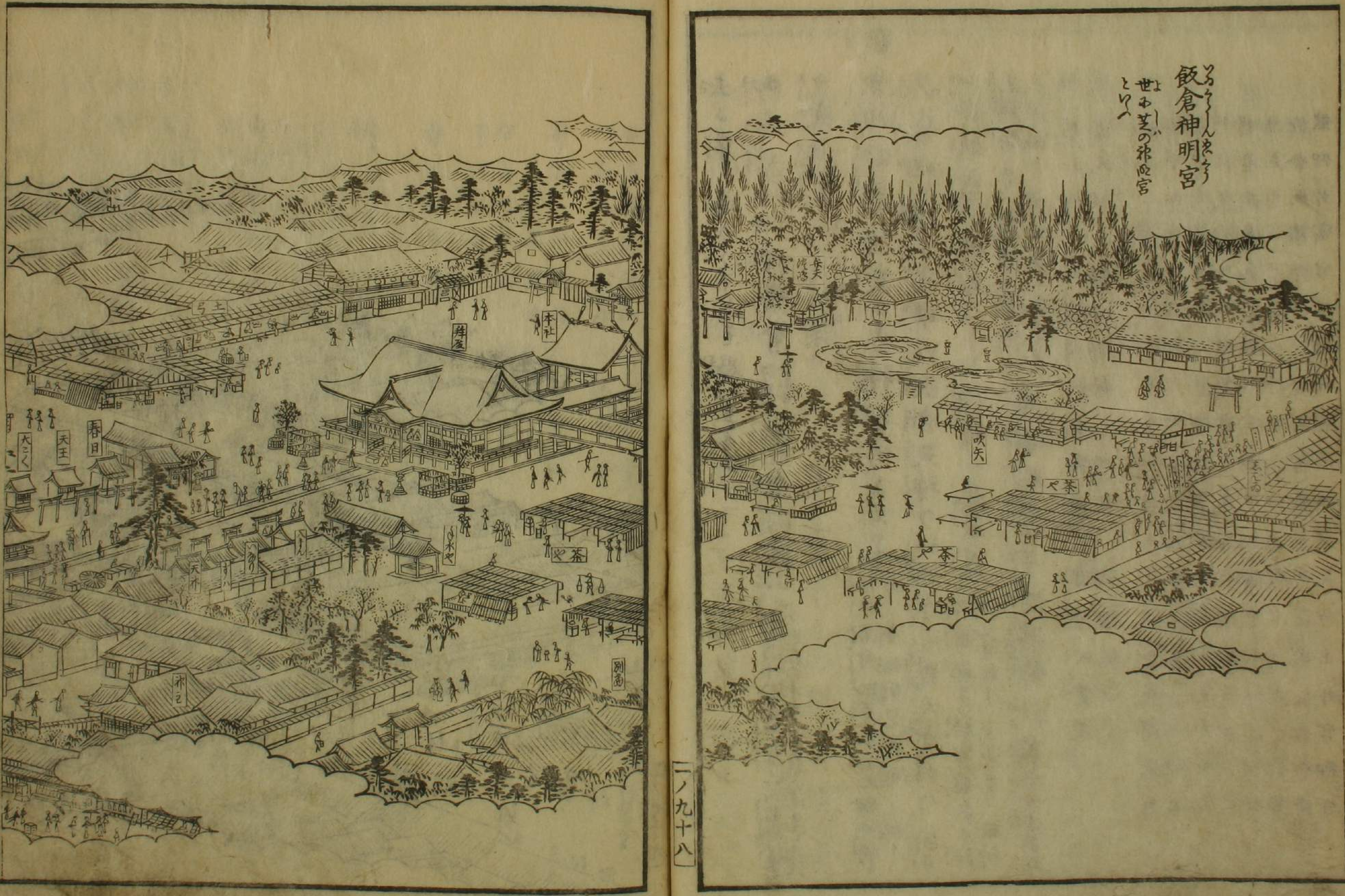
飯倉神明宮 同東の方神明町にあり

其舊地は增上寺境内飯倉天神の社地なりと或云赤羽の南小山神明宮の地なりとも 江戸名所記等には日比谷神明とあり今俗間芝神明と称す 社司は西東氏 名所記に往古當社の神託宣ありしより相州足柄郡より齋藤氏なる人を招て神主とすと云々別當は金剛院と号し其餘社家巫女にあり

神鳳抄云 武蔵國飯倉御厨 當時四貫文

同書又曰 飯倉御厨 長日御幣五十丁

東鑑曰壽永三年甲辰五月三日庚寅武衛被奉寄附両村於二所大神宮去永曆元年二月御出京之刻感靈夢之後當宮事御信仰異他社然者平家黨類等在伊勢國之由依令風聞遣軍士之時者縱雖為凶賊之在所不相觸事之由於祠官無左右不可亂入神明御鎮座之旨度々所被仰含也謂件両所者内宮御分武蔵國飯倉御厨被仰付當宮一禰宜荒木田成長神主外宮御分


飯倉神明宮
世に芝の神明宮といふ

安房國東條御厨被付會賀次郎大夫生倫訖爲
一品房奉行遣両通御寄進狀 下畧

寄進 伊勢皇太神宮御厨壹處
在武蔵國飯倉
右志者奉爲朝家安 爲成就私願殊抽忠丹
寄進狀如件
壽永三年五月三日
正四位下前右兵衛佐源朝臣

按に當社を飯倉神明宮と称しまつるハ旧飯倉の地にあるをもつて称す もとより其地ハ芝に三縁山今の飯倉天満宮の社辺なり 飯倉と云ハ往古此地に伊勢太神宮の御厨ありし由ハ地名を飯倉と唱へ又伊勢御神を斎きまつりしなるべし 猶飯倉の條下に詳なり 又東鑑に同年正月武蔵國大河土の御厨を豊受太神宮の御領に寄附のよし抔あれハ一國の内おほかりしことありしなるべし

社記云人皇六十六代一條帝の寛弘二年乙巳九月十六日伊勢皇太神宮を鎮座なし奉る 其時神幣と大牙一枚此地に天降る又此地の童女に神詫あり 彼二種のものをあがめて此地に跡をとゞめんとなり 依て當社を営まるとぞ 其後建久四年癸丑右大将頼朝卿下野國奈須野の原狩獵の時當社の神殿に寶劍

九月十六日
飯倉神明宮祭礼
御門前
氏子中

太好庵
神宮御祭禮
御門前
氏子中

一振を納め一千三百餘貫の美田を寄附ありて其頃繁昌の宮居たりしに過て後明應三年伊勢新九郎氏茂小田原北城主大森實頼を亡して後威を逞うせし頃是か為に神領を掠められ依て宮社ハ霧に朽風に破れ奉祀の人もなく大ゐ荒廢したりしを天正に至て四海昌平の御時忝くも台命によりて當社の廢れたるを興しあたへ神領若干を附せられし又寛永十一年甲戌よりゆるし神殿を修造なしあひしよりも社頭舊観に復す依て神燈の光りハ赫々として和光の月にあきらへ利物の花のにほひハ白い深くして神威昔に倍せる

當社の祭例ハ九月十六日なり同じ十一日より廿一日に至るの間参詣群集を商ひ物多き中にも藤の花を画きたる檜割籠ならびに土生姜殊に夥し故に世俗生姜市又生姜祭とも唱へ侍り江戸名所にちかしよ伊勢木鉢鮓菓物多しとあれど今ハ是を鬻ぐ檜割籠を俗にちぎと名づく又生姜を賣るにハ凡えきよりのすゆく雪拠をむらす

宇田川橋 宇田川町の大通りを横切て流るゝ小溝に架せり

烏森稲荷社

今ハ上に土を覆ふゆゑに橋の形を失そ 宇田或ハ宇多に作る 小田原北條家の臣宇多川和泉守といへる人架せしと云傳ふ 小田原記に大永四年上杉修理太夫朝興北条氏綱に責られ品川表にて戦ふを云条下に氏綱朝興を亡し首を実験ありて後品川の住人宇田川和泉守以下降参の者ともにつけ普請役んころに沙汰をとあり東海道驛路鈴に長禄元年丁丑四月八日太田道灌江戸にうつる其後宇多川和泉守長清ハ品川の館に住むとあり又元禄開板の江戸鹿子といへる草紙に昔此所へ宇田といふ刀を堕したるゆゑに此名ありといへり證とするにたらず

日比谷稲荷祠 芝口三丁目西の裏通りにあり 此所町巾至く狭し故に土人日蔭町と字す 本山方派修驗寂静院別當たり萬治の頃藍屋五兵衛といへる者託宣に依て花洛藤森の稲荷を勧請なせしゆゑいふとし 日比谷昔ハ比々谷に作る小田原北条家の所領役帳にも比々谷に作り此地を大胡宮内少輔所領の中に加ふ

烏森稲荷社 幸橋より二丁ばかり南の方酒井下野侯邸の北の横通りにあり往古よりの鎮座といへども年歴来由共に詳ならず 元禄開板の江戸鹿子といへる草紙に天慶年間藤原秀郷将門退治の時の勧請なりといへども信としかたし 又如何あるゆゑありてや當社の神宝に古き鰐口一口を納む 表に元暦元甲辰年

正月下河辺庄司行平建立と彫付てあり江戸名所記に日比谷稲荷の条下に云く
此宮地ハ借地なくありしに断絶におよふへき頃稲荷の神宮守に告て古来より社
燈挑なりとて鰐口ひとつを与へ給ふ宮守公へ訴へ此燈によつて宮居つゞきしとあるハ
當社のことを誤てしるすなるへし或人云く明暦の回禄に奇瑞ありしかハ其後社の辺
除地と 社司山田氏ハ柳営御連歌の御連衆より別當ハ快長院と
なりとぞ 号して本山方の修験なり祭禮毎年二月初午に執行る 幸橋御門に假屋を補理て神輿を
移し參詣群集して賑へり

古河御所足利成氏願書一通當社に蔵す

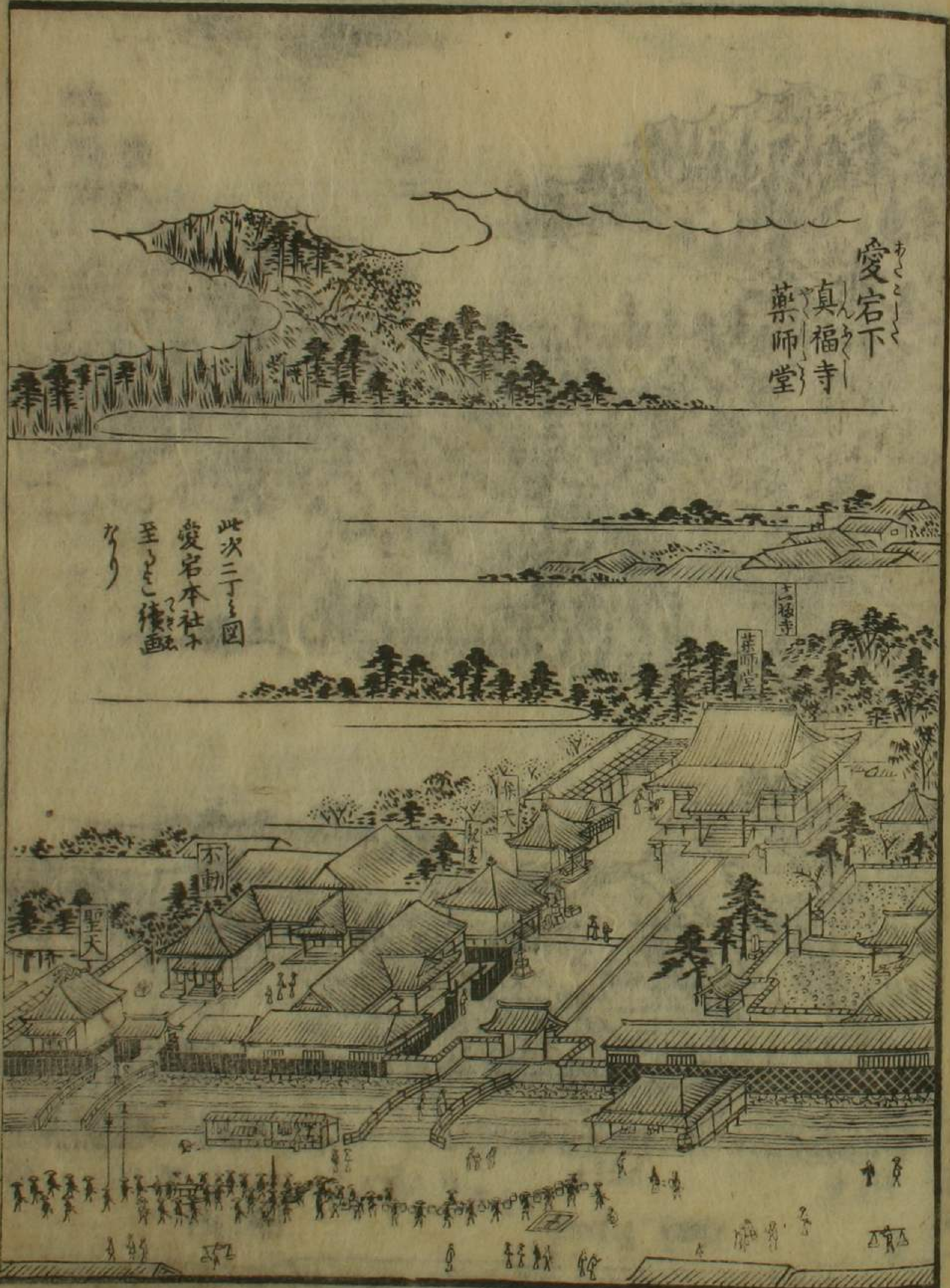
稲荷大明神願書事
今度發向所願悉於成就者當社可遂修造願書
之状如件
享徳四年正月五日　左兵衛督源朝臣　成氏判

藪小路 愛宕の下通り加藤侯の邸の北の通りを云 同所艮
の限裏門の傍に少しはかり竹叢あるか故にしかいへりされと
其来由詳ならす傳説あれとも證とすへし
三齋侯此地に住せられしとそ庭中の
小池を三齋堀と号くといふ 慶長より寛永の頃に至て細川

櫻川　同所愛宕の麓を東南へ流るゝ溝川をしか名く新著聞集に昔虎の門の辺より愛宕の辺迄悉く田畑にして畔に櫻樹幾株ともなくありし其中を流るゝ故櫻川といひしとあり　下流ハ宇田川橋の方へ流れ又三縁山に傍ふて金杉の川へ落合へり

摩尼珠山眞福寺　櫻川の西岸に傍ひてあり新義の眞言宗にして江戸四箇寺の一員知積院の觸頭なり當寺本尊藥師如来の靈像ハ弘法大師の作なり慶長の頃甲州の領主浅野長政當寺中興照海上人をして自らの等身に藥師佛の像を手刻せしめ件の靈佛をハ其胎中に籠めるといへり　毎月八日十二日ハ縁日にして参詣多し

愛宕山權現社　同南に並ぶ世俗城州愛宕山に同しといへと自ら別なり本地佛ハ勝軍地藏尊にして行基大士の作なり永く火災を退けらるゝの守護神なり樓門の金剛力士ハ



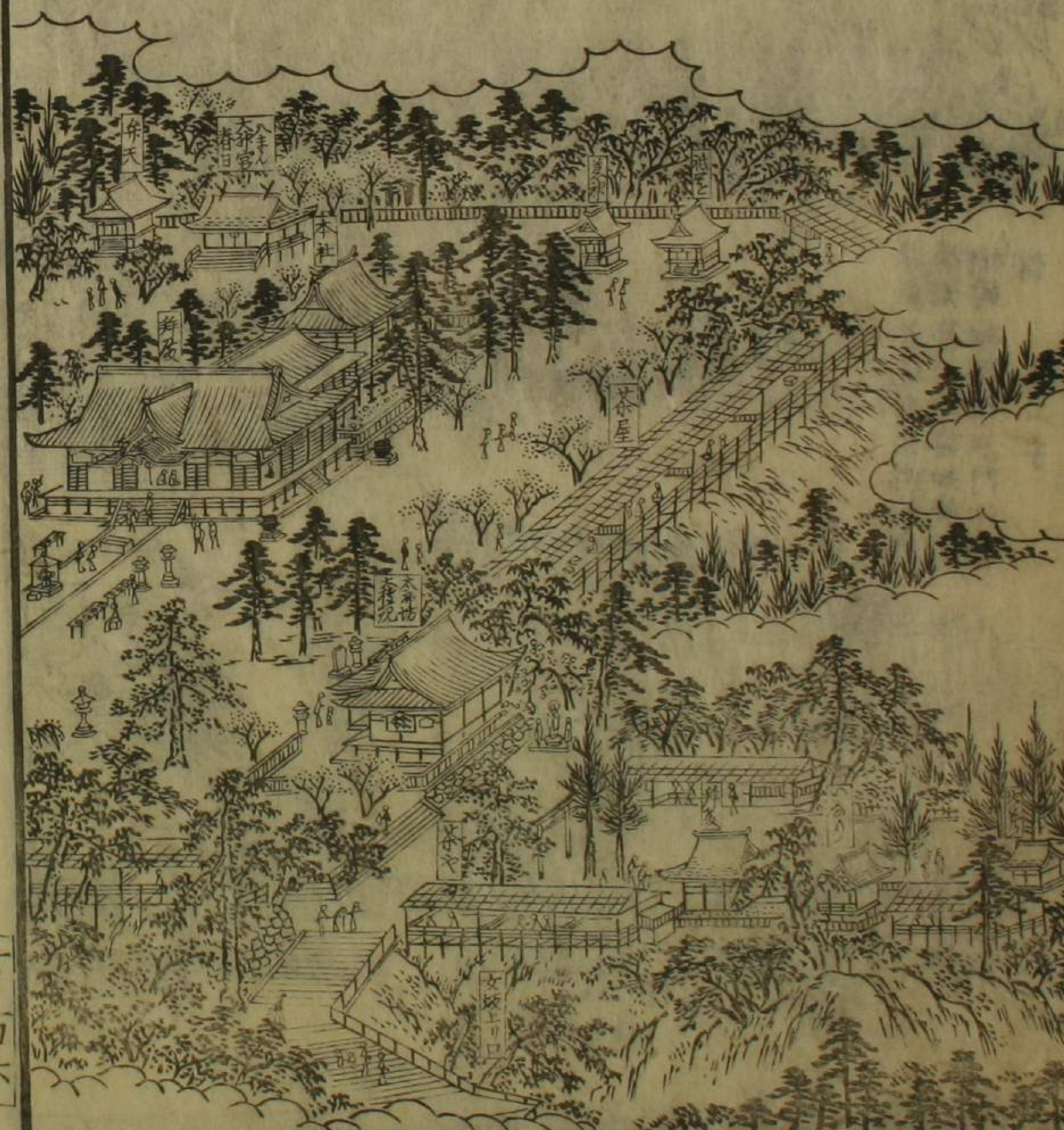
愛宕社惣門
其二
女坂

男坂
役行者
別当
惣門
京洛移迂座武州築擅
構閣陟山丘誰知幣帛
神封物却作沙門活命
謀　羅山子

宕山高倚勝軍宮
晴日登臨積水東
江樹千里連闕下
海雲一半傍城中
祇憐精衛仍含木
誰識鵾鯤忽鼓風
羨殺魚鹽都會地
治生無似陶朱公
服元喬

其三

山上
愛宕山権現
本社図

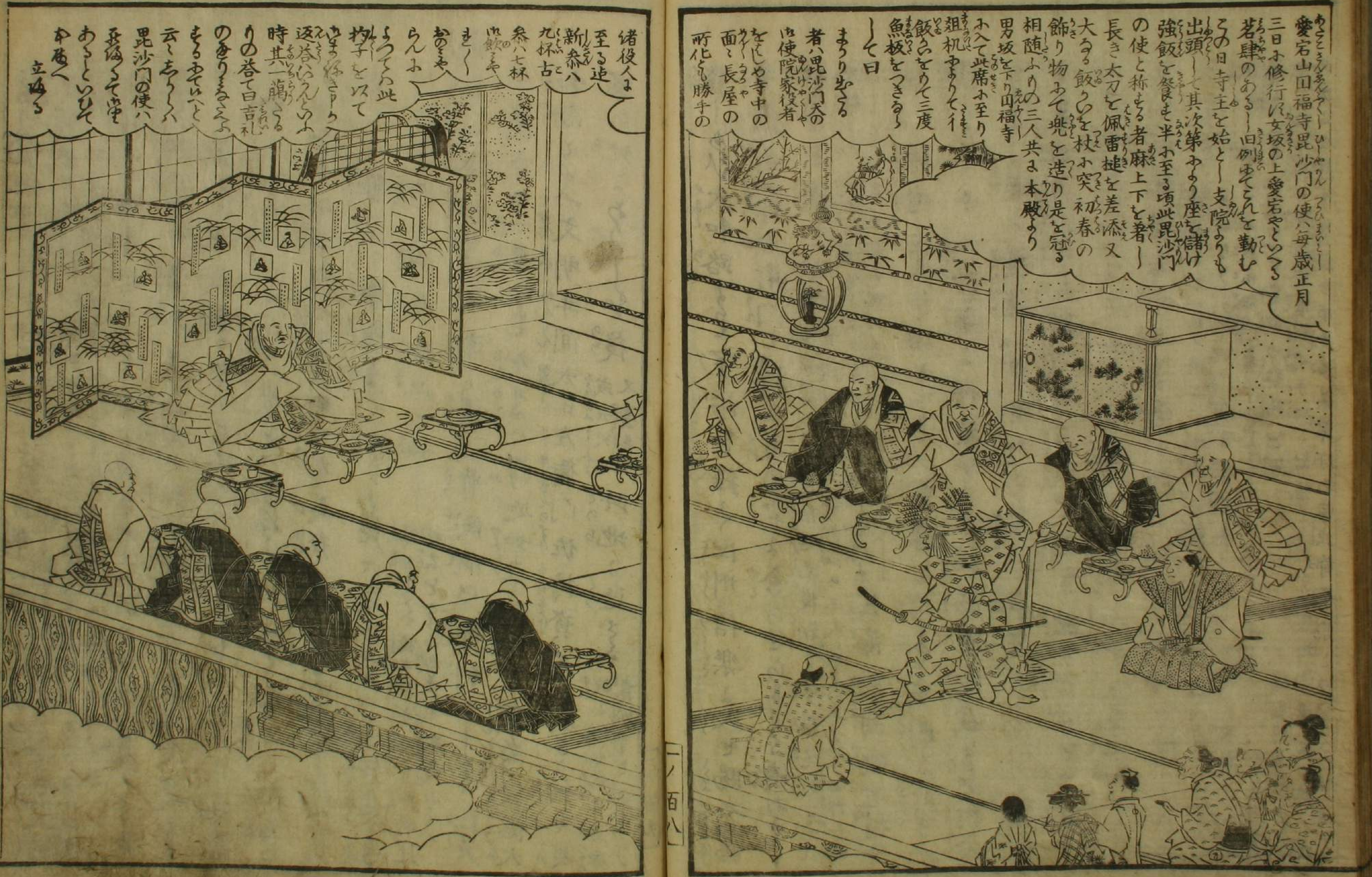


運慶の作同二階の軒に掲し愛宕山の三字ハ智積院権
大僧正の筆なり別當圓福敬寺ハ石階の下にあり新義の
真言宗江戸の觸頭四箇寺の随一なり開山を神證上人と
號す二世俊賀上人といふ（四箇寺とハ湯島根生院本所弥勒寺當所眞福寺並に當寺をいふ）

神證上人字を春音といひ後あらためて春香と号す下野の人にして姓ハ
塩谷氏母ハ皆川氏なり元和五年鈞命に依て金剛院に退居せらる
天正年を経て春音の坊ハ遍照院と号す今の圓福寺是なり金剛院普賢院
満蔵院鏡照院壽桂院等並べて六院あり俊賀上人字ハ圓精と号す野州
西方邑の人姓ハ越路氏なりしく宇都宮弥三郎頼綱の後裔父ハ伊勢守近律神
祠に祈りて産す其始下妻の圓福寺に住を然るに其頃下総結城の元寿上州
松井田秀峯等一世の豪俊なりしく俊賀上人をあハせて新義の三傑と称せらる
元和五年俊賀上人愛宕権現の別當に命せられ共に圓福寺の号をもて一宇を
開かしめあひ永く大法幢を樹大法鼓を撃夏冬廃ることなし終に檀林と
なかる学徒業として雲の如く起る實に江城檀林の權輿なり

縁起曰天平十年戊寅行基大士江州信樂の辺に化の時當
社の本地将軍地蔵尊の像を彫刻しあひ後安部内親王に
奉る（弟四十六代孝謙天皇の御事なり）親王則彼地に宝祠を営ミて是を安置ありし
あるに（其旧跡をも今宮村と名つく）然るに天正十年壬午の夏 台祺泉州を

發しあひ大和路よりも宇治を経て江州信樂に入せ賜ふ此時
多羅尾四郎右衛門といへる者の宅に舎らせられる頃あるし
此像を獻ず（多羅尾家譜にいふ左京進光俊初て多羅尾と号す其子常陸介綱知三好若江の三人衆といふ其子四郎兵衛
光綱江州信樂を領すと云く多羅尾ハ四郎左衛門にあらす四郎兵衛光綱入道道賀のなるへし）其節同國磯尾村の
沙門神證といふを供せしも此靈像を持して東國に赴かふ
爾より 御出陣毎に神證をして此勝軍地蔵尊を祈念
せしめらる遂に慶長八年癸卯の夏 台命によりて同庚
子年石川六郎左衛門尉當山を開き假に堂宇を造建し
あひ其後同十五年庚戌本社を始悉く御建立ある元和三年
丁巳同國豊島郡王子邑に於て百石の社領を附しあふ
となるも（惣鹿子といへる冊子に此地ハ元櫻田の村民内藤六郎といへる人の
宅地なりしを沙門春音慶長庚子の御出陣に勝軍の法を
修せし地なり其後征伐ありしふよりて當社を御建立ありしと云又同書
慶長八年九月廿四日貴賤の参詣を許さるとあり江戸名勝志同名所
記るに始山城の愛宕を遠州鳴子坂に勧請し夫より駿州宇津屋に移し後
又爰に安置す慶長の頃本多美濃守の家臣都築某といへる人の勧請なり）


愛宕山円福寺毘沙門の使ハ毎歳正月
三日ニ修行ス女坂の上愛宕やといへる
茗肆のあるし旧例ニてこれを勤む
この日寺主を始とし支院のものも
出頭して其次第ニより座を儲け
強飯を饗ます半ニ至る頃此毘沙門
の使と称する者麻上下を着し
長き太刀を佩雷槌を差添又
大なる飯かいを杖ニ突初春の
飾り物ニて兜を造り是を冠る
相随ふもの三人共ニ本殿より
男坂を下り円福寺
ニ入て此席ニ至り
俎机ニよりて行
飯かいをもて三度
魚板をつきならして日
まかり出たる
者ハ毘沙門天の
御使院家役者
なといや寺中の
面々長屋の
所化とも勝手の
諸役人ニ
至る迄
新参ハ
九杯古
参ハ七杯
御飲そや
まし
おのそや
らんニ
よつて此
杓子を以て
たまはるか
返答いかにと
時其一鵡なる
りの答て曰吉例
のきりなるニ
まかせはへと
云しまゝハ
毘沙門の使ハ
立帰るて御堂
あるといひて
本庵へ
立帰る

とあり此説圓福寺に云傳ふるすなく澄ともへうくし按に此山の地主神ハ毘沙門天なりとて今も本社の相殿に安置も毎歳正月三日毘沙門の使と称する舊祀の式あり其式画上に詳なり按に當寺開山俊賀師ハ始野州にあり野州辺にくるくの強飯の式ありて世に所謂日光の古式に准ふて當寺に行ふものも恐らくハ俊賀上人より始るなるん歟

當山ハ懸岸壁立して空を凌き六十八級の石階ハ疊々として雲を挿むかく聳然たり山頂ハ松柏鬱茂し夏日といへとも此に登るものハ涼風凛々としてかつて炎暑をしらす見落せハ三條九陌の万戸千門ハ甍をつらねて所せく海水ハ渺焉として千里の風光を貯へ尤美景の地なり月ごとの廿四日ハ縁日と称して参詣多くとり紀六月廿四日ハ千日参と号けて貴賤の群参稲麻の如し（縁日ごとに植木の市立て花木をうるもの夥しく四時此壮観なり）

萬年山青松寺　同南に隣る曹洞派の禅刹にして江戸三箇寺の一員たり开基ハ釋迦如来開山を雲崗俊徳大和尚といふ文明年間太田左衛門佐持資草創せし初ハ貝塚の地にありしを後（或云天正又慶長）此地に遷さる（故に今も俗に貝塚青松寺と称せり）

一に青松寺の旧地ハ今の平川馬場の南の方なりと云（南向亭云く青松甲斐と云人草創す其旧跡ハ糀町の貝塚當時玉虫八右衛門といへる屋鋪にありて彼墓と甲斐塚と云と菊岡沾涼ハ青松宮内と云人の建立なりといへり又當寺に太田道灌の塚ありといへれ詳ならす）

當寺の後の山を含海山と号く眺望愛宕山に等しく美景の地なり惣門の額万年山の三大字ハ蘭溪道隆の筆なり

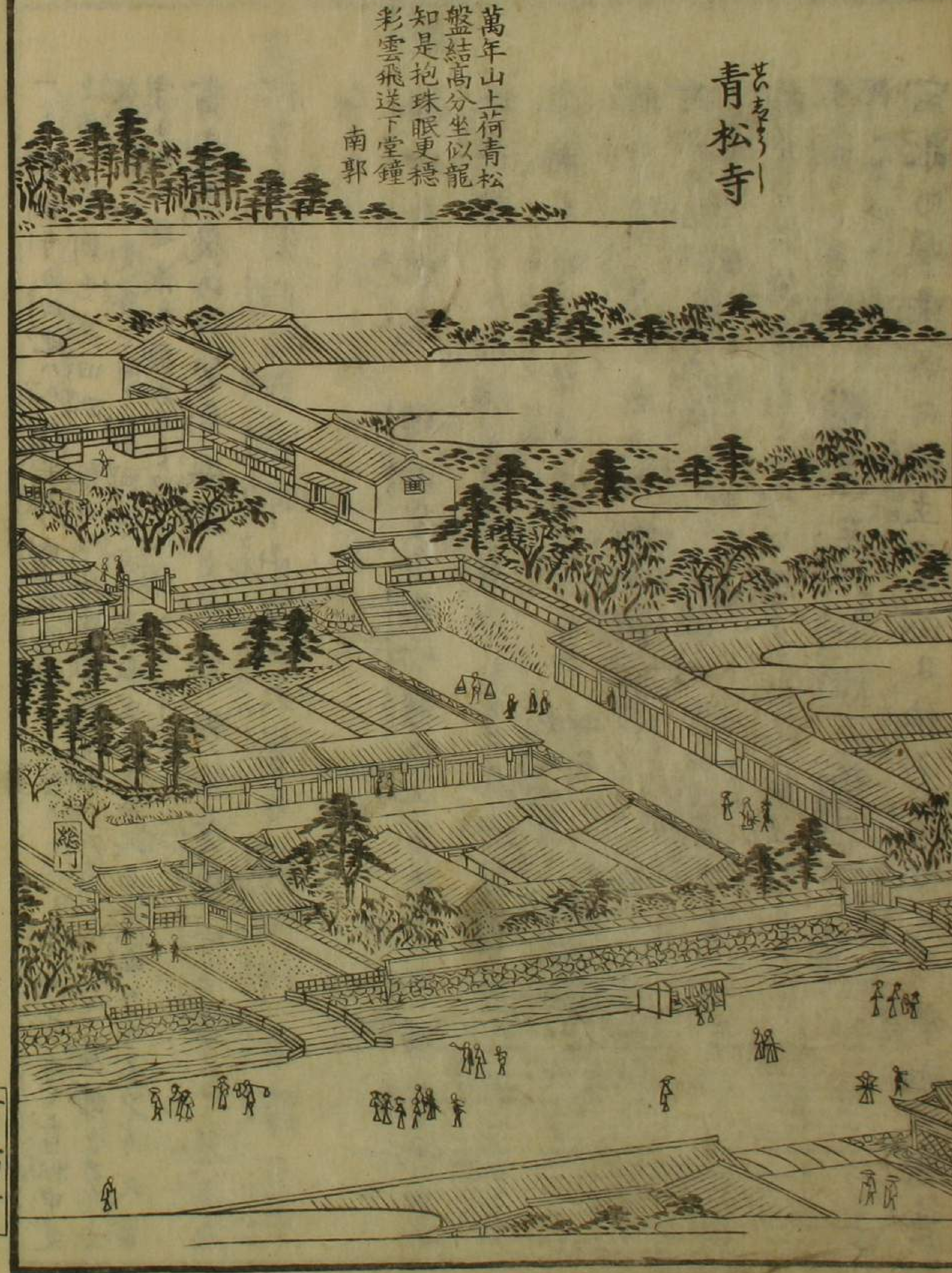
勝林山金地院　増上寺の西切通の上にあり京師南禅寺の塔頭にして南禅寺の宿寺なり五山の僧録と称をかねるハ（或人云宋人陳和卿か作なりといふ）本尊ハ唐佛の聖観世音菩薩なり（毎月十八日觀音懺法修行す）開山を大業和尚と云（其頃碩学なりしかハ撰定衆に加へられ寺社の訴へをも決断せしむ五山の僧録司に命せられ）都留の毛衣と云草紙に古ハ寺社裁許の事ハ金地院の沙汰なりしを寛永中より武家の職となると云々

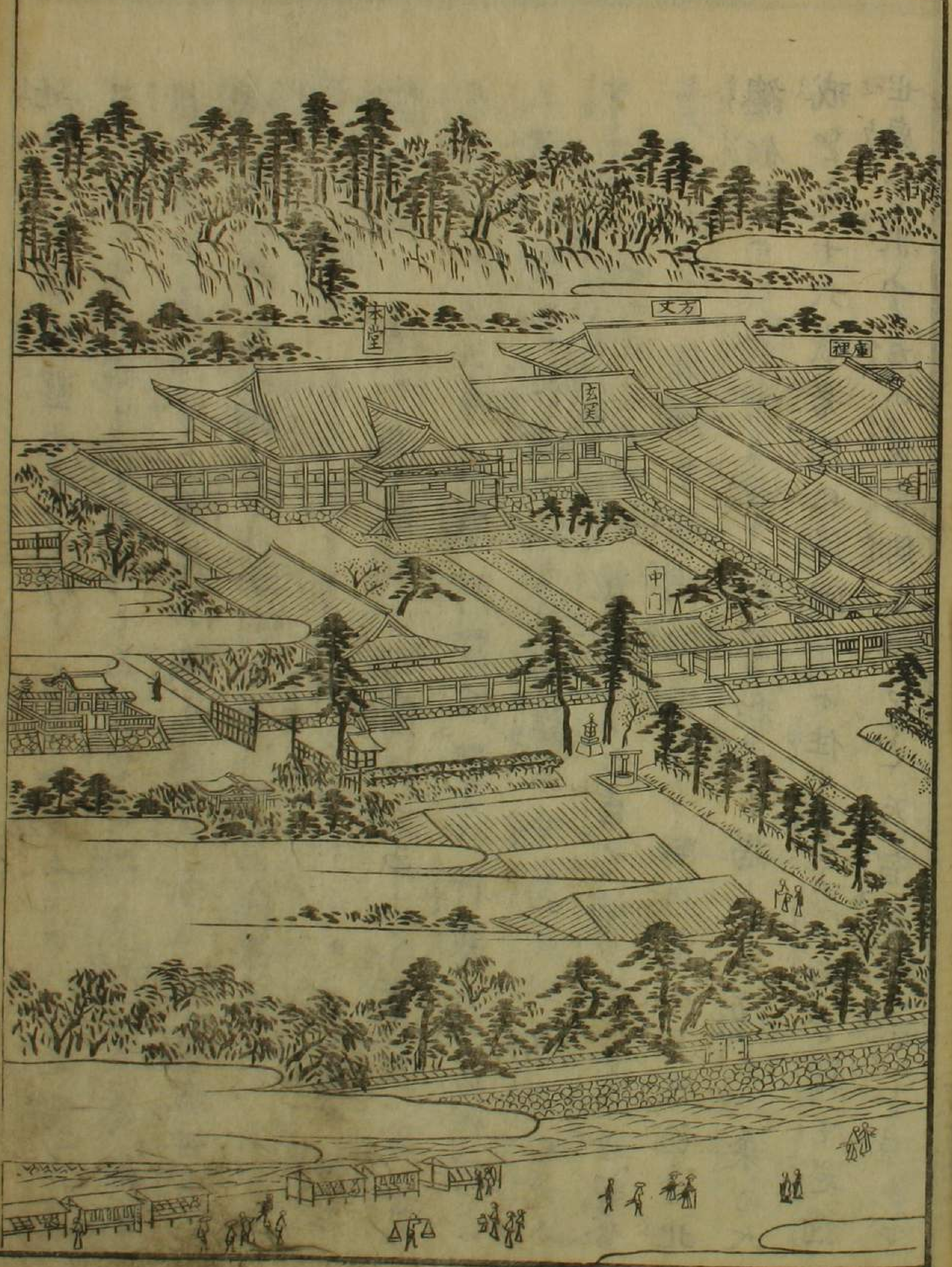
境内に青葉楓と称する古木ありしか今ハ焼亡してなしといへり（此木も當寺御城内にありし頃の物なく）後此地へ栽るといへり

閻魔王の石像ハ塔中二玄庵の前にあり宝永の頃南部の領主霊夢に依て彼地より麻布の別荘

青松寺（せいしやうじ）

萬年山上荷青松
盤結高分坐似龍
知是抱珠眠更穩
彩雲飛送下堂鐘
南郭



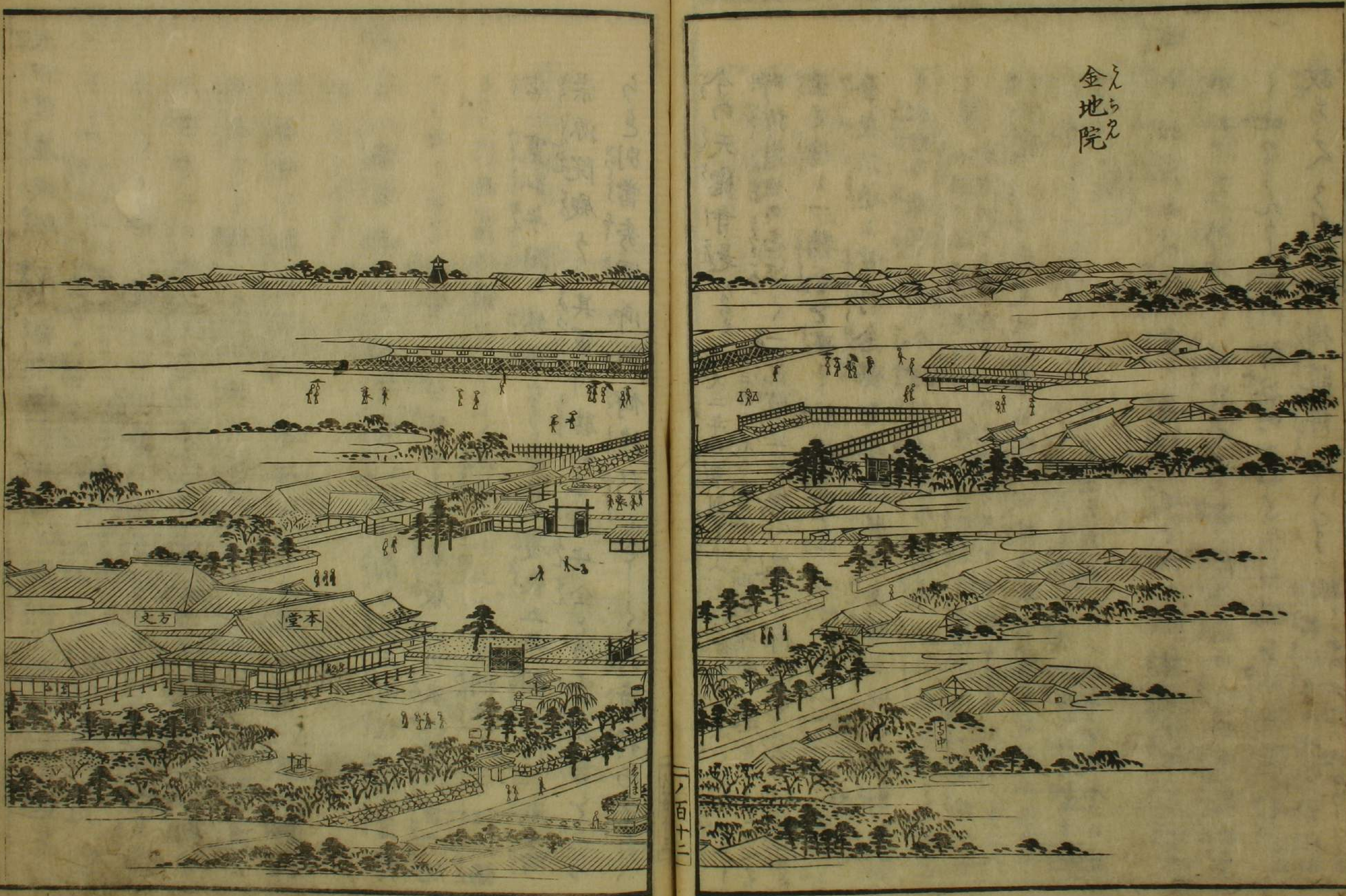


遷されし再ひ威霊あるによりて又こゝに安置して金地院と書せし三大字の額ハ水雲写とあり方丈同淳溟筆薦福殿岩元雄の書塔中二玄庵の額も同筆なり本尊観世音の像ハ大の月三月續る中の月の十八日にハ開帳あり

光明山天徳寺　和合院と号す西久保神谷町にあり　花洛智恩院に属せ浄家江戸四箇の一にして紫衣の地なり支院十七宇あり本尊阿弥陀如来ハ行基大士の作開山ハ三蓮社縁誉称念上人なり師諱ハ吟翁武州品川の邑に生る（父ハ藤田左衛門尉道昭と云母ハ冨永氏或ハ云冨田氏）九歳にして甫て増上寺第七世親誉上人に従ひて薙染を聰明絶倫なり師の遷化に及ひて北總飯沼の弘経寺に至り鎮誉和尚に謁して浄土一乗の大戒を受十六歳岩附の浄國寺に住し大に法輪を轉も志猶世塵を厭ひて應ふ後古郷に帰りて天智庵（知或ハ又地に作る）を草創せ

今の天徳寺是なり（天文二年の草創にして先師親誉を以て開山祖とし自二世に居る舊地ハ西丸御城の邊なりしとぞ）師弥遁世の志深く一包破笠を携へ錫を荷ひて洛の知恩院に至り傍に一精舎を建て住し是を一心院と号す（一心院ハ念佛三昧の一本寺也）昼夜不退に常行念佛を修し新に念佛三昧の法則を製し永世の標準とせり今諸國厭悠の道場此法式をもつて定矩とす（花洛市原野の専称庵上嵯峨の称念寺下嵯峨の正定院桂の極楽寺田井の會念寺淀の念佛寺等を草創ありてみな不断念仏の道場とす）天文廿三年の秋一心院に寂を實に七月十九日なり化壽四十一と云へし（今世間用ゆる所の二連數珠も師の製する所にして是を貫輪として佛号を唱ふるの徒此念珠を用ひさることなし）

城山　西窪土岐山城侯の藩邸の辺を云土俗熊谷次郎直實の城跡といひ傳ふるは誤なるへし昔熊谷氏の人此に居宅ありし地なるへし同所神谷町にかゝる所の石橋を熊谷橋と号るも故あるへしされと今傳説詳ならず（菊岡沾凉云此所ハ昔麻布數とりやの出丸の地なりしと云）



金地院（こんちゐん）

太田道灌城跡 或ハ番神山とも号す西窪仙石家第宅の地なり とぞ 紫の一本にいはく太田道灌取立し城地なり今は土取場となりて塀崩せしと云く 又昔此地に小堂ありて土仏の釈迦を安置し法華堂と号く後豆州玉澤法華寺の日朗上人持念せる所の墨画の三十番神の画影を携来りて諸人を結縁せしむ然るに小田原北条氏後に社を建て彼番神を勧請す故に番神山といふ其画像ハ後京師に移せりとなん

西窪八幡宮 同所天徳寺裏門より南の方三町程飯倉町一丁目にあり 別当ハ天台宗にして東叡山の末八幡山普門院と号す西窪の鎮守にして旅所ハ小山にあり 相伝ふ当社八幡宮ハ寛弘年間の鎮座なりといへり 慶長五年関原御一戦の時崇源院殿より其軍御勝利と御安全との御願書をあげられ別当秀圓御祈祷修行ありしに其奇特ありけれハ

寛永十一年甲戌二月終に宮社御建立ありしとぞ祭禮ハ
毎歳八月十五日なり

飯倉

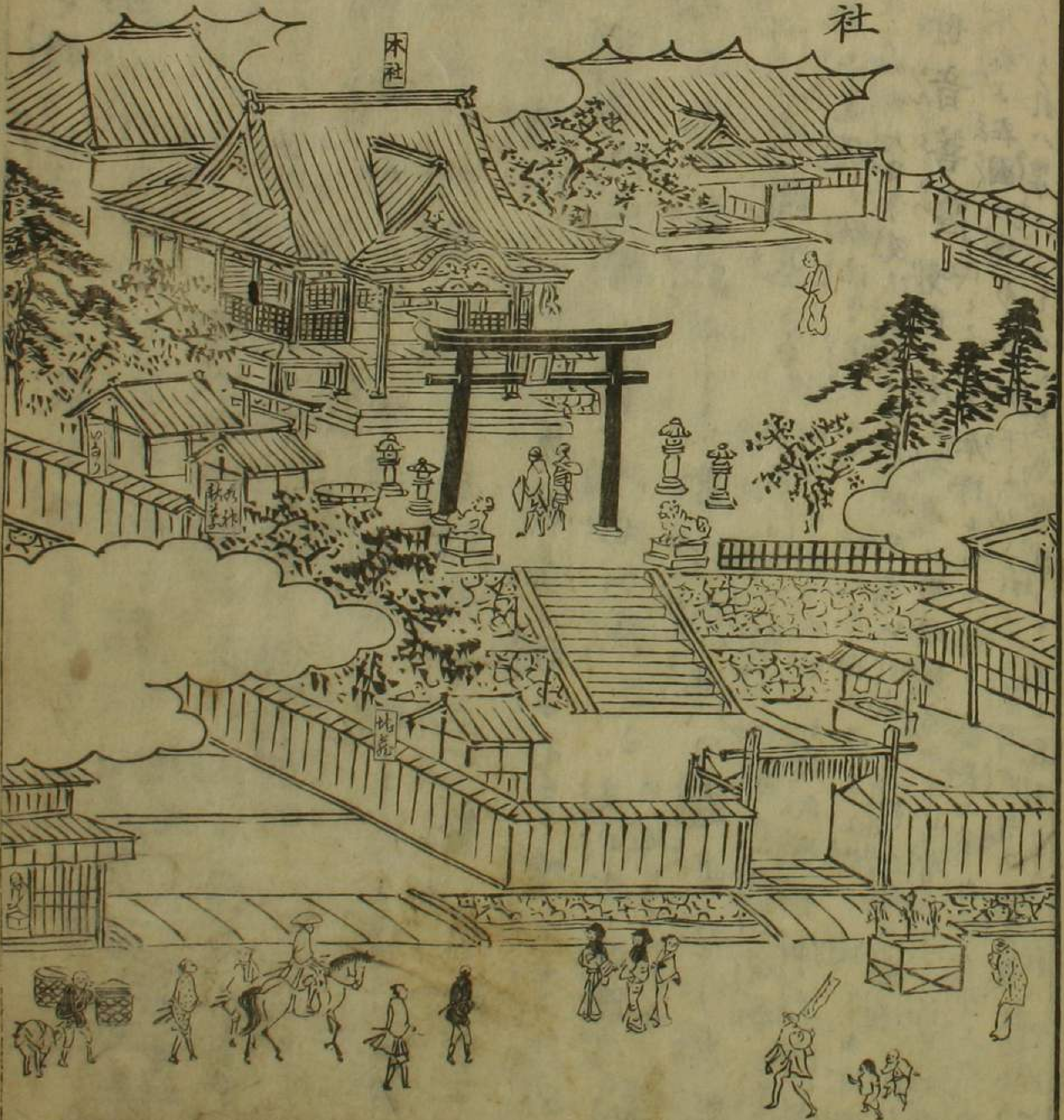
西窪の南を云此地ハ往古伊勢太神宮の神厨の地なりし故に其御饌料の稲を収めし倉を飯倉と唱へけるとぞ地名に呼びけるなるべし（永禄の頃小田原北条家の臣大草左近太夫飯倉弾正忠太田新六郎島津孫四郎此地を領せしよし北条家の所領役帳に見えたり同書に飯倉の内櫻田とあるハ往古飯倉の地の廣かりしなるべし又駒込吉祥寺に蔵せる所の北条家人遠山左衛門太夫政景元亀二年江戸にて五十五貫六百八十五文の地を彼寺に寄附ある状に飯倉の地名あり此中三貫三百文ハ以前より巽の輪大蔵が寄附せし地なりとあり猶前の芝神明宮の条下にも神鳳抄東鑑等の書を引擲とす照合せらるべし）

熊野権現宮

飯倉町にあり或人云養老年間芝の海濱に勧請ありしを遙の後今の地に移さるるとぞ別當ハ三集山正宮寺といふ天台宗にして東叡山に属せり（毎年六月朔日より三日まで祭礼を修行す）

勝手が原

土器町より赤羽へ出る廣小路の辺をいふとぞ昔ハ三田の方へかけて廣漠の原野なりしが太田道灌江戸の城より



飯倉 熊野権現社

勢を出せし時は此所にて人数を揃へられしとなり

赤羽川 渋谷川の下流なり新堀と号く 延宝江戸図に麻布新堀とあり元禄嗣校 元禄の始鈞命によつて是を堀らしめたまふとなり 江戸鹿子といへる艸紙に此河の上に赤羽の池と云ありと云 江戸名勝志に溝口信濃守伊達美作守の両侯これを兼られしとあり

赤羽橋 同じ流に架す按に赤羽は赤埴の転じたるなるらん歟 此辺茶店多く河原の北には毎朝肴市立て繁昌の地なり

心光院 同所橋より北の河原道より右にあり 増上寺の別院にして宝暦の頃縁山より此地に移さる 其旧地は涅槃門の辺なりと云 当寺は鎮西上人の古跡にして常行念仏の道場なり 恵照律院光阿上人開基とす 光阿上人は横連社継誉心岩頭夢と号す 加州小松の人姓は加波氏越前浄光院の随流に投じて剃染流頭に嗣法せり 宝永三年乙卯八月晦日当寺に於て寂す 当寺の傳燈系図にえたり 加州大日寺及び当寺并恵照院等を開基し不断念仏の道場とす 増上寺の所着

布引観世音菩薩 境内に安せり本尊は馬頭観音なり 代々これを奉持せるといへり 慶長の頃丹羽五郎九郎長重奥州二本松に在国の時ある日城下に出られしに熊野道者の馬に乗来るにあへり 其馬駿足なりければ長重の乗試るに実に名馬なりければ買得て名を

道者と唱ふ終に大将軍家へ献ぜらる 騏を追せものに布一端を後輪の塩手両方にむすび附ものに彼布一文字に靡る故に改て布引と命せられて愛し給ひしが彼馬斃るの後増上寺境内に埋めて石塔を建られし其後又件の石塔を本尊として馬頭観音に崇めるとなり宝暦の頃寺と共に此地へ引れたりしといへり

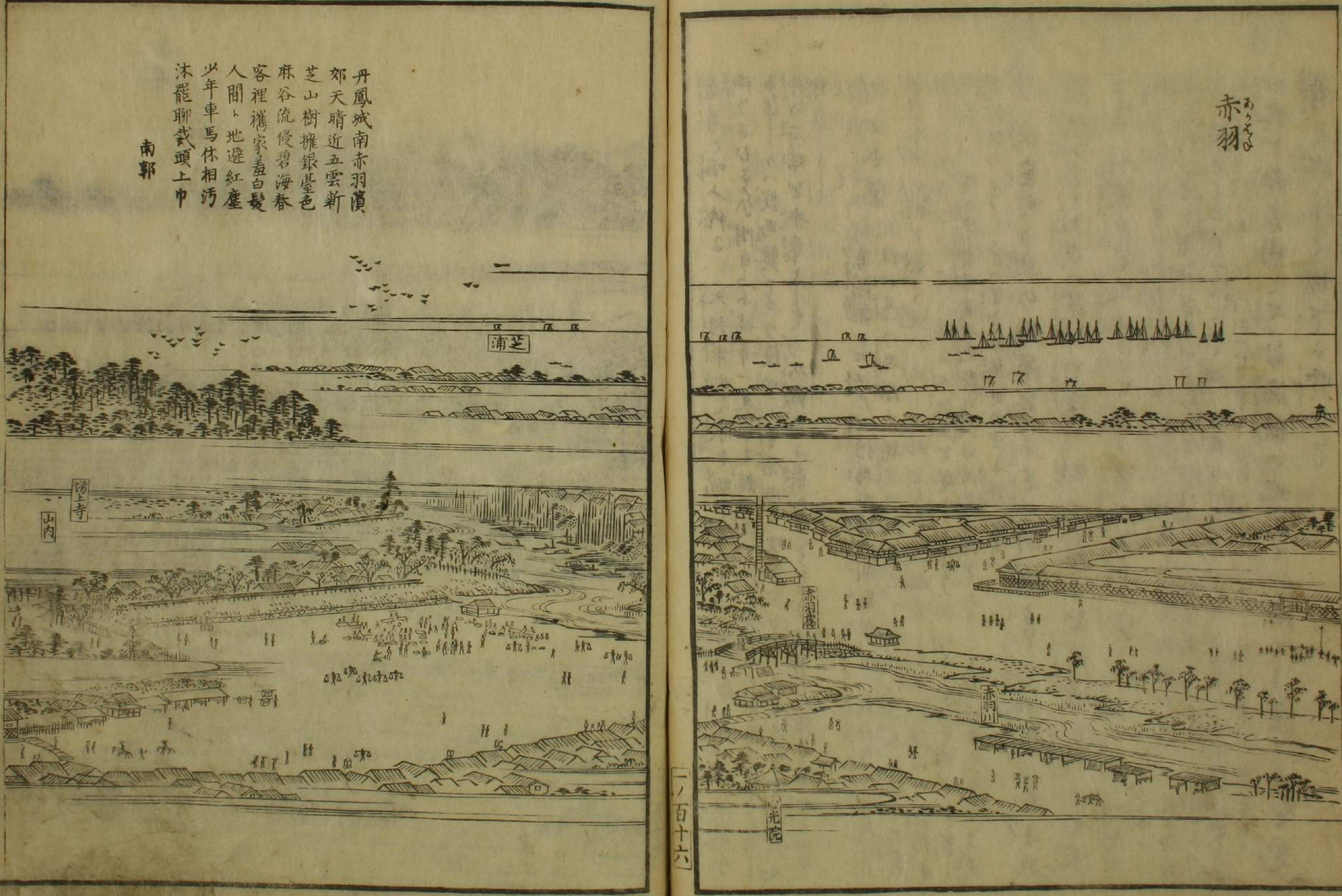
竹女水盤 新著聞集に云江戸大伝馬町佐久間勘解由が召仕の下女たけは天性仁慈の志深く朝夕の飯米己が分は乞丐人に施し其身は水盤の角に網を置て洗ひ流しの飯をうけ其溜りしものを自らの食料とす 常に称名怠る事なく終に大往生を遂しとなり彼竹女が常に網をあて置し水盤は今増上寺念仏堂心光院の門の天井に掛てありと云 件の水盤より光明を放ちたりしとなり 当寺の縁起の中に詳なり

芝浦 本芝町の東の海浜をいふ芝口新橋より南田町の辺迄此惣名なり上古は芝を竹柴の郷とよびしを後世上略して柴とのみ呼来りしを又文字も芝に書改たりとぞ 更級日記に竹柴の郷といへる事を挙たり 猶三田済海寺の条下に詳なり 南向亭云芝といふは彼地の古老の説に海岸近き所に柴を建海苔のかゝるをとる 木の小枝を柴といふより地名によびしが後芝に改作ると云 按に此説是ならず 海苔をとる事は元浅草の辺なりしを昔は今の如く品川あたりはなくして古へにいたりなきに似たり 此地を雑魚場と号け漁猟の地にして此海より産するを芝肴と称して都下に賞せり

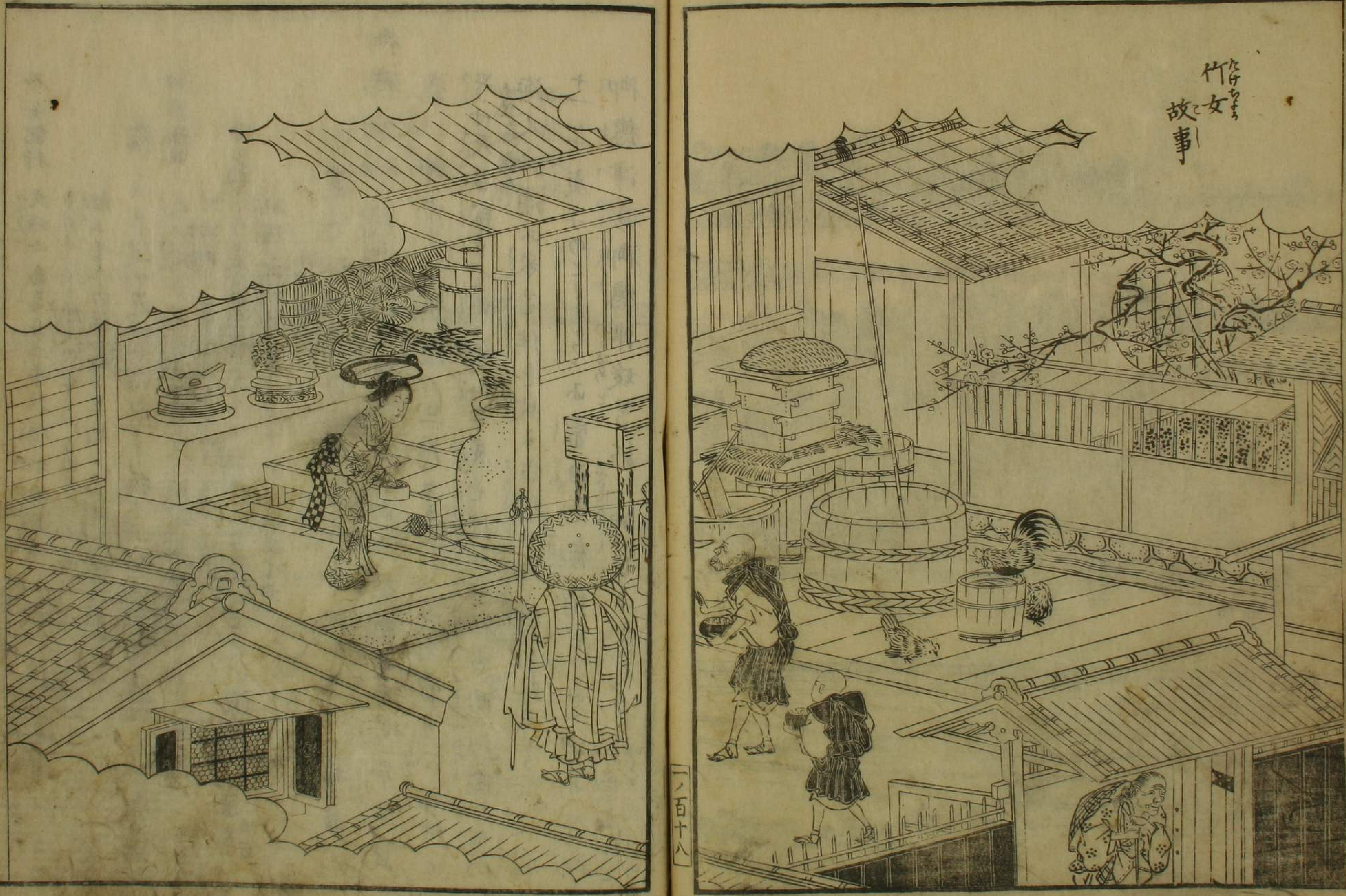
赤羽（あかばね）

丹鳳城南赤羽濵
郊天晴近五雲新
芝山樹擁銀臺色
麻谷流侵碧海春
客裡攜家垂白髪
人間卜地避紅塵
少年車馬休相汚
沐罷聊戴頭上巾

南郭



赤羽(あかばね) 心光院(しんくわうゐん)



竹女の故事

平安記行 文明十あまり二年の頃水無月のはしめつかた土さへさけてとか旅人のやすらひのせし避暑の床をもわすれて都にまうのほりぬ 中畧 芝といふ所を過るとて

露しけき道の芝生を踏ちらし駒に任するあきくれのそら 太田道灌

回國雜記 芝の浦といへる所にいたりぬれハ塩屋のけふりうちなひきて物淋しきに塩木をはこふ舟ともを見て

やかぬより藻汐の煙名にそ立舟にこりつむ芝の浦人 道興准后

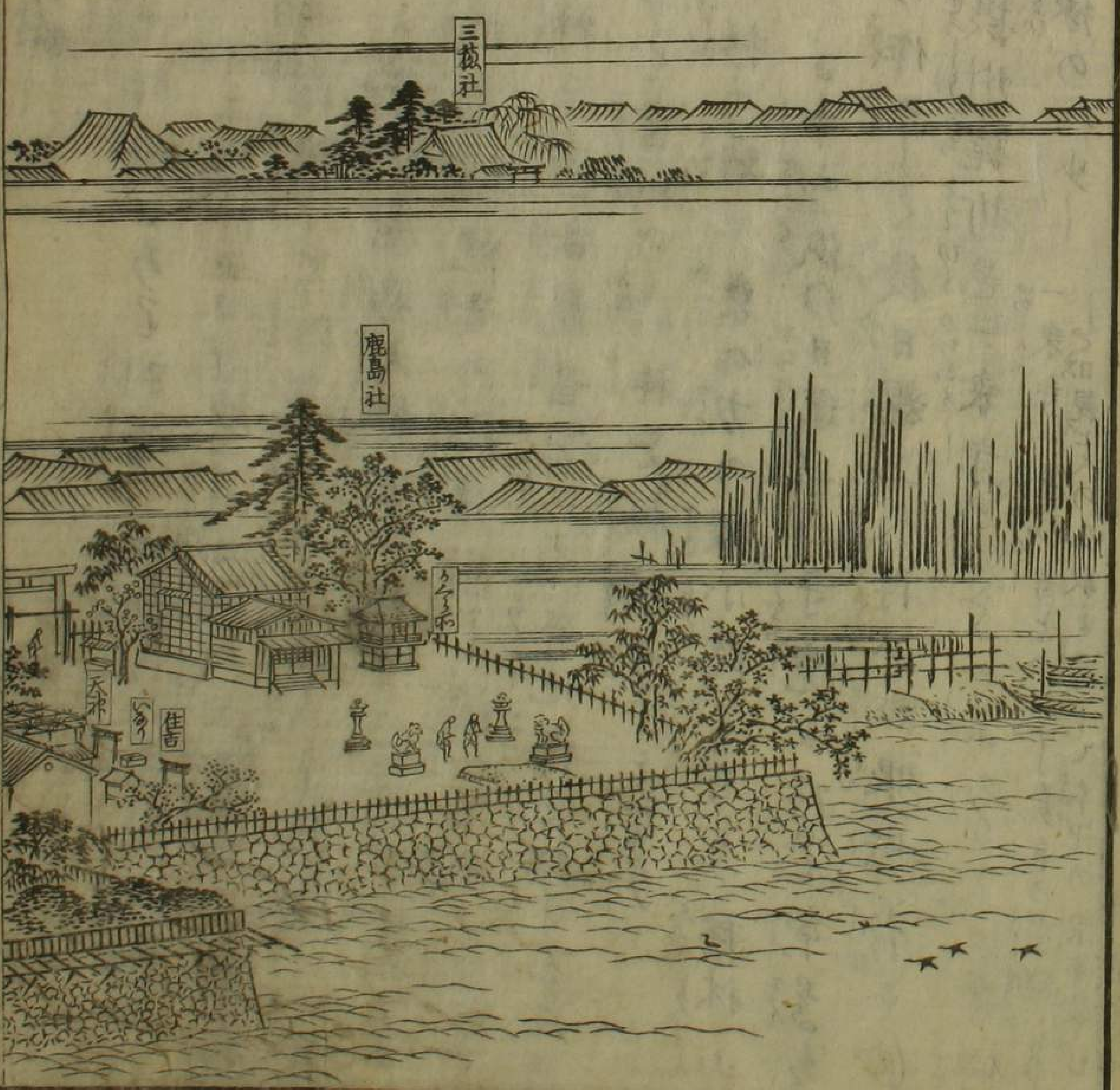
此浦を過てあら井といへる所にて云々

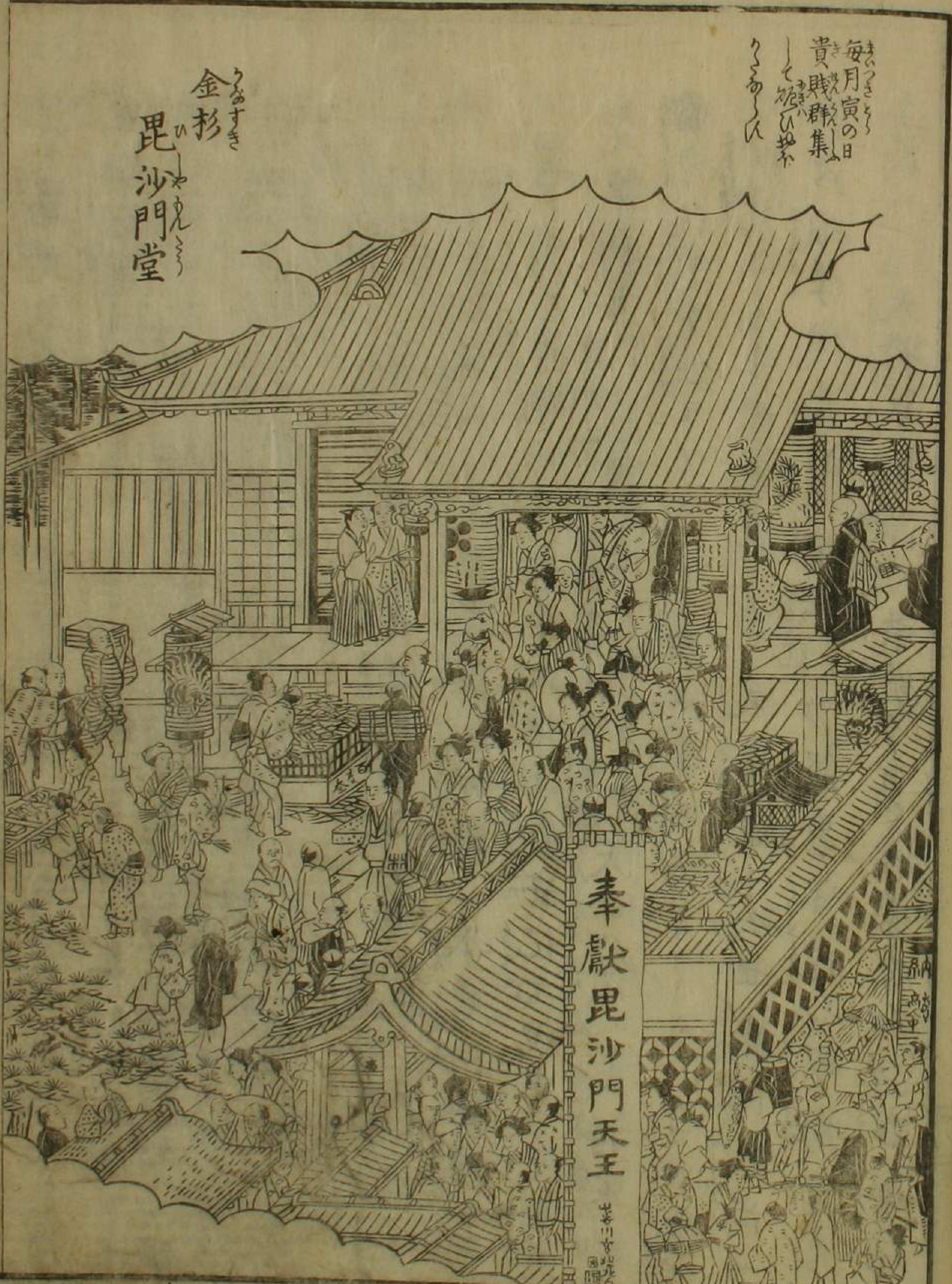
江戸にて

芝といふものゝ候夏さしき 梅翁

御穂神社 同所本芝通りより西の横町にあり本芝の産土神なり祭禮ハ三月十五日なり別當を正福寺と号す天台宗にて東叡山に属せり傳へ云往古駿河國三穂の海人此浦に来て住を故に古郷の御神あれとて文明十一年庚子のとしこゝに當社を勧請せしとなり祭神御穂津彦御穂津媛命二神なりといへり 土俗當社を疱瘡の

御穂神社 鹿嶋神社





守護神とし祈願の衆多し

鹿島神社 同所海濱にあり別當ハ御穂神社に相同し祭禮も又同しく三月十五日なり此土人傳へ云寛永年間此浦に一の小祠漂流して汀に止るあり漁人これを揚て其本所を尋るに常州鹿島大神宮の社地よりなりし小祠ありころより又其頃十一面觀音の木像同し海汀に流よりしかハ鹿島明神も十一面觀音をもつて本地佛とせしかれハ是によつて當社の御神を勧請せしとなり

毘沙門堂 金杉の通り東の方の横小路にあり松林山正傳寺といへる中山派の日蓮宗の寺境にありて本尊ハ傳教大師の作にして後日親上人再ひ點眼供養ありしとぞ住古ハ摂州堀折邑一乗寺といへる寺にありしとも僻地にして結縁の人少し

一乗寺ハ金仙寺といひし真言の密場なりしを日親上人の弘教に帰して法花の宗に改む

依て寛文の頃衆生化益の為日栄上人こゝに移し建るとなり
霊験感応の著しきことハ寺記に詳なり故に参詣の貴賤日ゝに
多く寅日を殊に群集せり 正月初の寅日参詣の人大方八芝の神明宮の門前にて燧石をもとめて帰る輩あり 洛北の鞍馬山の毘沙門天へ正月初の寅日詣する輩燧石を買て家土産としこれを眷持すると是に準ふといへり
霊験著し 日親堂 日親上人の像を安す

田中山西応寺 金杉の通りより西の裏にあり 門前を寺町と唱ふ 西応浄土
宗にして三縁山に属せり支院三宇あり本尊阿弥陀如来 明賢
の像ハ慧心僧都の作なりと云 伝ふ応安紀元戊申の年明賢
上人草創を 明賢上人ハ応永五年戊寅黄鐘十日に遷化せり年八十六歳といへり 天正の頃 大将軍家
當寺に駕を枉させられ寺領御寄附ありしかハ学徒朝夕
の助寛にして学道盛なり又當寺十六世存問和尚一
宗の碩学にして當時法門の龍象学道の麟鶴なりし
かれハ 大将軍家深く崇敬ましましけるより 台命に

依て一夏の間法幢を建一百餘人の衆僧に宗風の法意を
示をすゝめて念仏三昧他力往生のをしへ日ゝに大いに弘まり

三田 或ハ御田及ひ箕多に作ると 古神領にて寄附ありし地を御田と書る由古老の説なり

和名類聚鈔云 荏原郡御田云云
武蔵國風土記残篇云 荏原郡御田郷或箕多
公穀三百六十七束仮粟百三十九丸貢松竹蔵□
等亦有諸禽充大膳或木工寮云云

按に此地を渡辺の綱か旧跡とするは誤なるへし 或人云此地ハ三田家の旧領にして三田氏累世こゝに居住を三田家譜に三田三河守其子駿河守綱勝武州三田に住を代ゝ綱といふ字を名とせと依て後人渡辺の綱を混し交へて誤る歟と云 渡辺系図に云源次充武蔵國足立郡箕田郷に配せらるとありて三田とあるのなし 三田箕田同訓なる故に混雑してかゝる附会の説をハまうけしなるへし 鶯峯文集に箕田園の記と号するものありて此地を渡辺綱か旧跡とせしハ誤れり其文にいはく 永禄二年小田原北条家の所領役帳に大田新六郎知行の内三田内 楽寺分同箕輪寺屋敷分又島津弥七郎知行三田坂間分及中村平次左衛門知行三田高福寺分本住坊寺領に同所にて惣領分の地等を配せると見えたり

綱坂 同所松平隠岐侯と會津家との藩邸の間を寺町へ

小山神明宮

下る坂を号く（惣鹿子に渡辺坂とあり菊岡沾凉云此所ハ箕田武蔵守の居城跡なりと）又同所有馬家の藩邸北南の坂を綱か引坂と号く綱か産湯水と云ハ同所肥後侯の園中綱か駒繋松と称するハ隠岐侯の藩邸綱塚ハ同所功雲寺の境内にあり

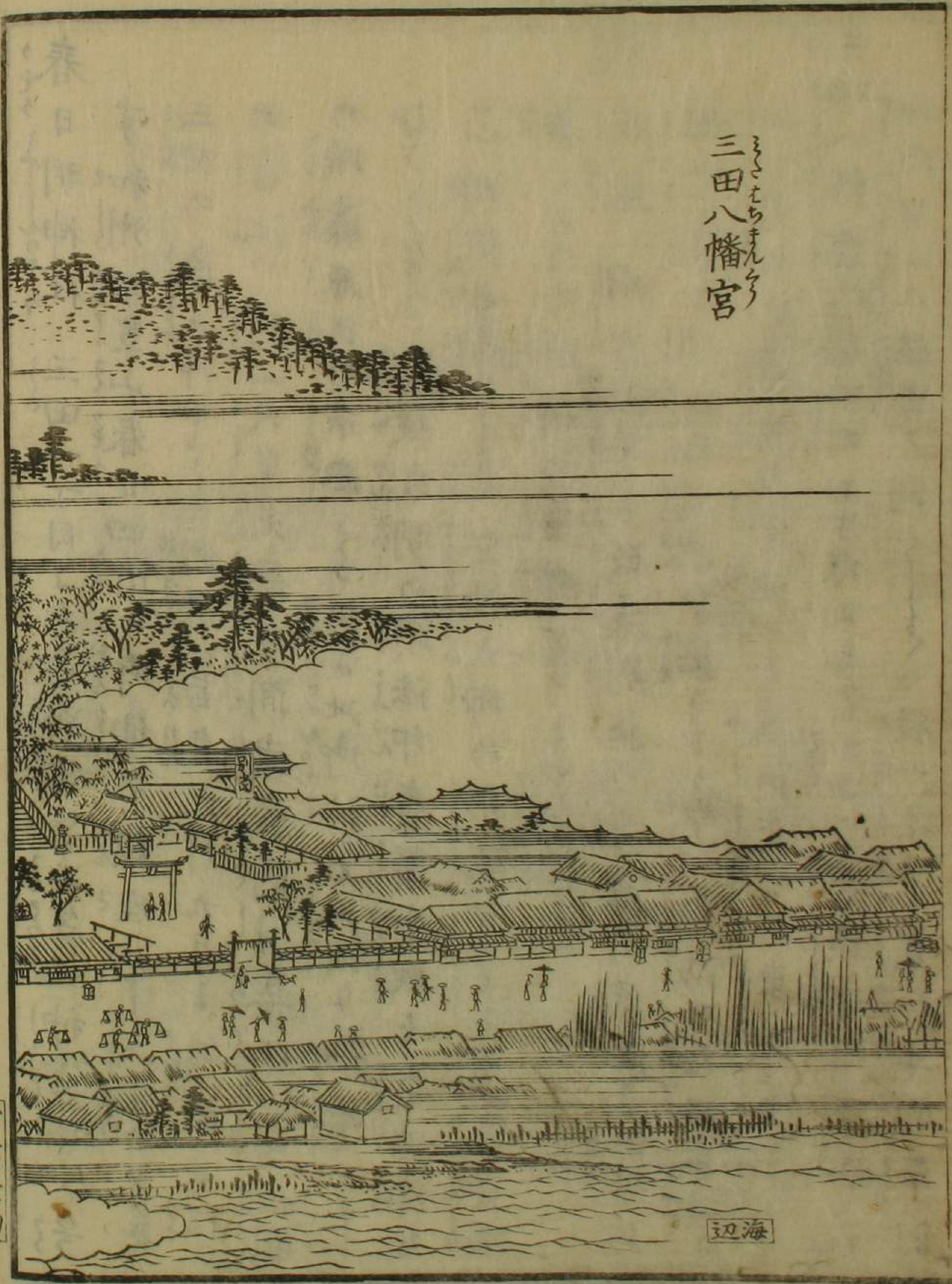
按に窪三田に綱生山當光寺といへる一向派の寺あり渡辺の綱か出生の地なりといひ傳ふ又三田八幡宮の神躰をも渡辺の綱か守護神なりとしまへく此辺綱に縁あるもの多し會津家の別荘にも綱か塚と称するものありて塚上の松を懐古松と號けらる鵞峯先生箕田園の記を作る其畧に云く武蔵國荏原郡渋谷荘箕田邑ハ源綱か陳迹なり綱か老松仕をえし此所に終るとありしより已来数百の星霜を歴といへとも其塚猶存も塚上に松を栽て遺跡を標せ則是壮氣いまた散せれ千歳の餘情猶其あることのり明暦四戊戌の夏會津源公此地を賜ひ別荘としたまひ其塚を存せられ蓋其の勇を取り古の士を尚ふことのめく記されたるを此地ハ箕田にあらん然ハ前の三田の條下に詳なり照合せらるへし

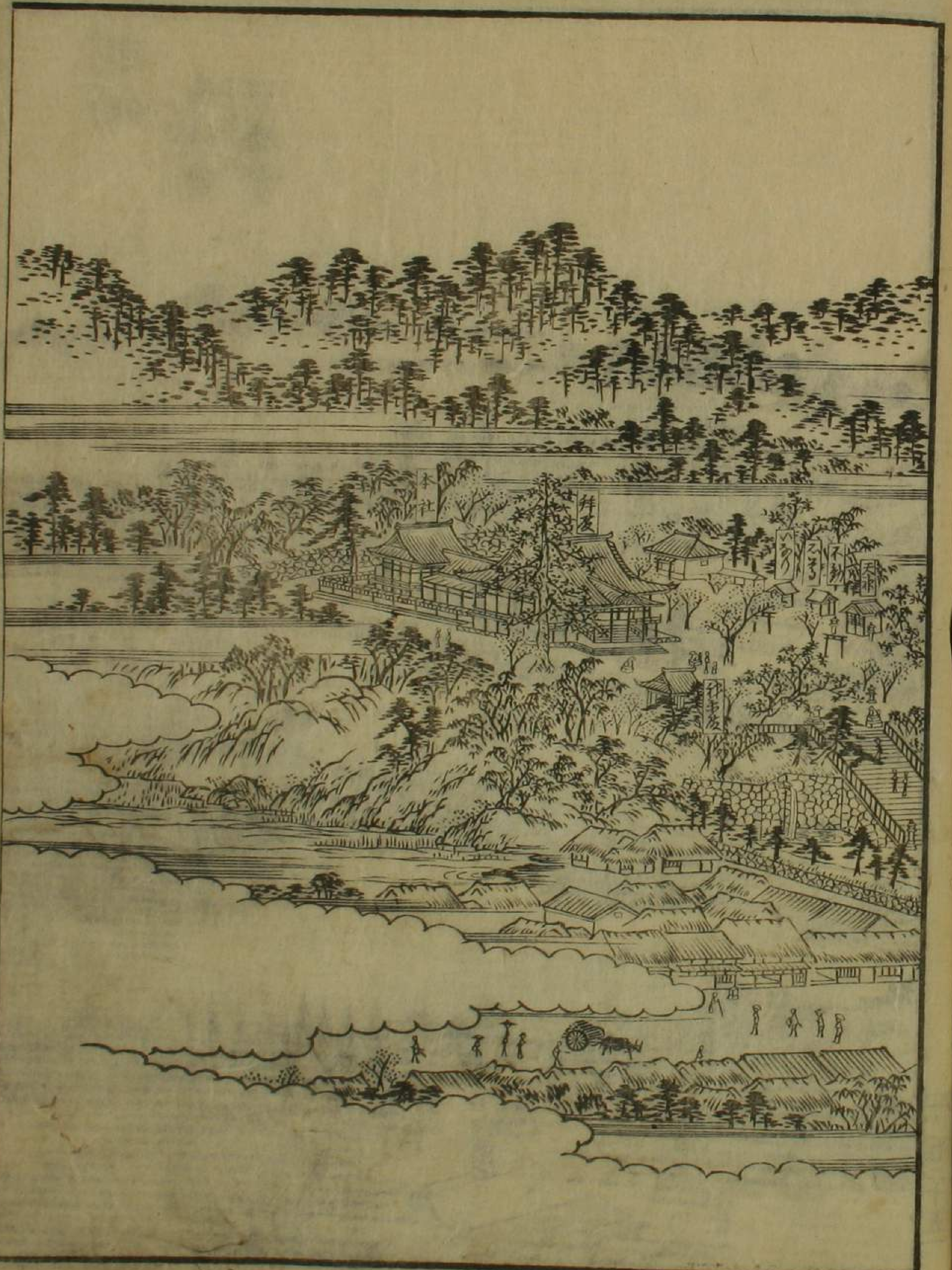
小山神明宮 同所有馬家と黒田家の間小高き所にあり神躰ハ雨寶童子別當ハ天台宗不動院と号す此所を飯倉神明宮の舊地とするハ誤なるへし

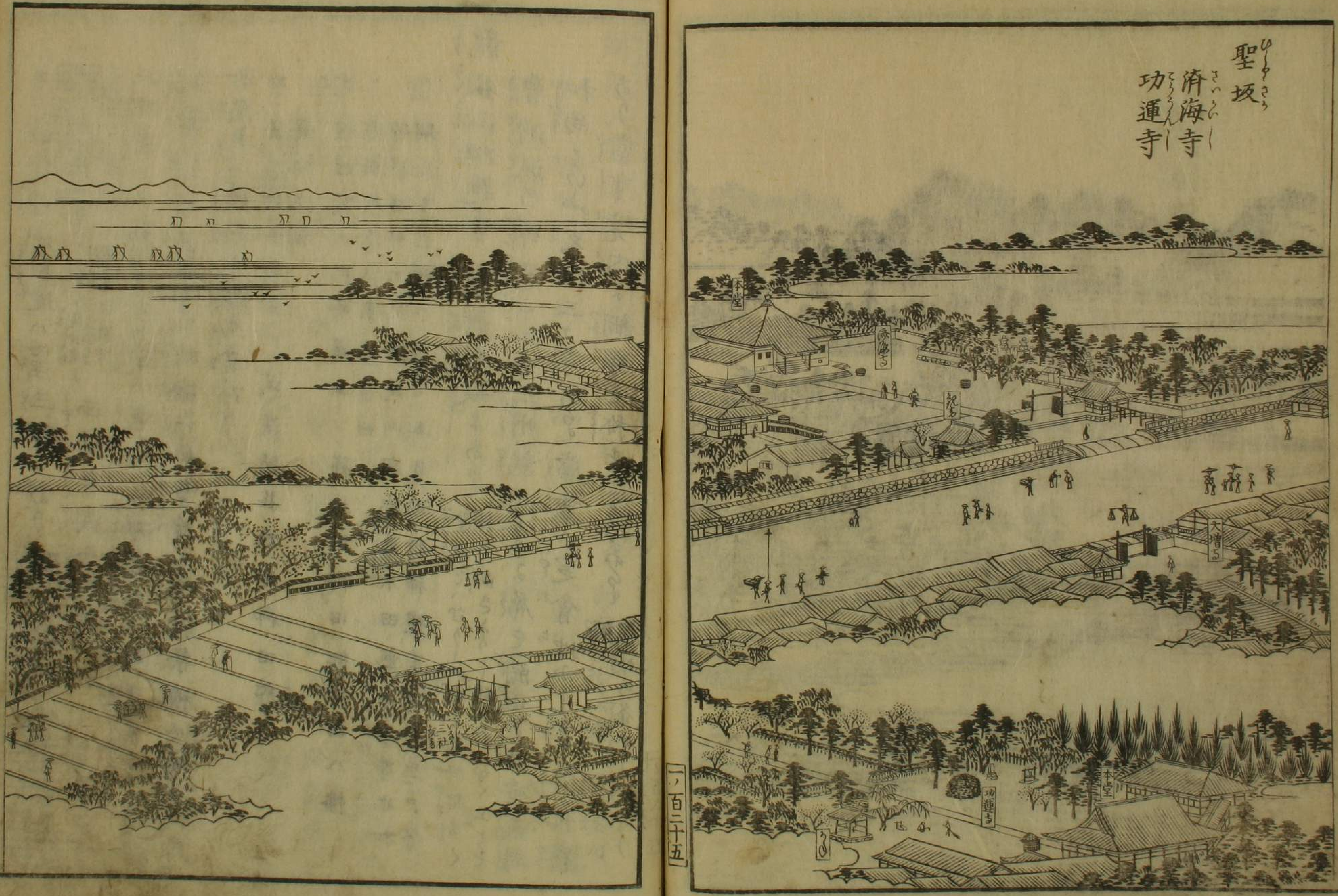
春日明神社　三田一丁目にあり別當を三笠山神宮寺と号す和州三笠山春日四所の御神を鎮座なし奉るとぞ三田の産土神にして例祭ハ毎年九月九日に修行す傳へ云當社ハ村上天皇天德年間武蔵國司藤原正房任國の頃藤原氏の宗廟なる故に此御神を此地に勧請せしむるところ也其後文明の頃法印慶賢中興す本地佛ハ十一面觀世音にして弘法大師の彫造なりといふ慶賢瑞夢によりて感得の靈佛なりといひ傳ふ

月波樓　同所松平主殿頭別荘の看樓の号なり此地北眺望實に洞庭の風景を縮るがごとく岳陽の大觀を摸す似たり依く城南の勝地とも羅山先生の東明集に詳之

三田八幡宮　芝田町七丁目にあり三田の惣鎮守にして祭る所山城男山八幡宮と同しく　後一条帝寛仁年間草創


三田八幡宮
海辺




聖坂
済海寺
功運寺

まとひ侍る旧地ハ窪三田にあり 正保年間今の地へ移しまつるといへり 土人云當社ハ延喜式の神名記及ひ武蔵風土記等の書に載る所の稗田神社是なり今も其旧地に一社あり窪三田八幡宮と称す

此地後ハ山林にして前ハ東海に臨む故に風光秀美なり

別當ハ天台宗にして眺海山無量院と号く祭禮ハ隔年八月十五日に修行す放生會あり

延喜式神名帳云　武蔵國荏原郡御田郷

稗田八幡

武蔵國風土記残篇云　荏原郡御田郷稗田八幡

圭田五十八東三字田

所祭應神天皇也武内宿祢荒木田襲津彦等也和

銅二年己酉八月十五日始行神禮有神戸巫戸等

龍谷山功運寺

同所聖坂にあり 聖坂とハむかし此地に高野聖多く住して開きたりし坂なれハかく云とそ 曹洞派の禅窟にして三州龍門寺に属す開山を黙室天周和尚といふ支院三ヶ寺あり 當寺ハ定會地にして所化寮あり當寺境内に綱塚と称するものあり 綱塚ハ前の三田及ひ聖坂の条下に詳なり

周光山済海寺

聖坂の上道より左側にあり浄土宗にして京師智恩院に属す上古ハ竹柴寺と号して巍々たる真言の古刹なりしか中古荒廃に逮ぶ依て法誉上人念無和尚中興す 其庭海岸に臨む沖より目當の燈籠あり

當寺庭中の眺望ハ實に絶景なり房總の群山眼下にあり最も雅趣あり朝夕に漂ふ釣舟ハ沖に小く暮て數點の漁火波を焼かと疑る春芳發して緑陰深く風露爽にして氷霜潔し四時に觀をあらたむ風人の眼を凝しむる一勝地なり

月の岬といふも此辺の惣名なり

竹柴寺舊址

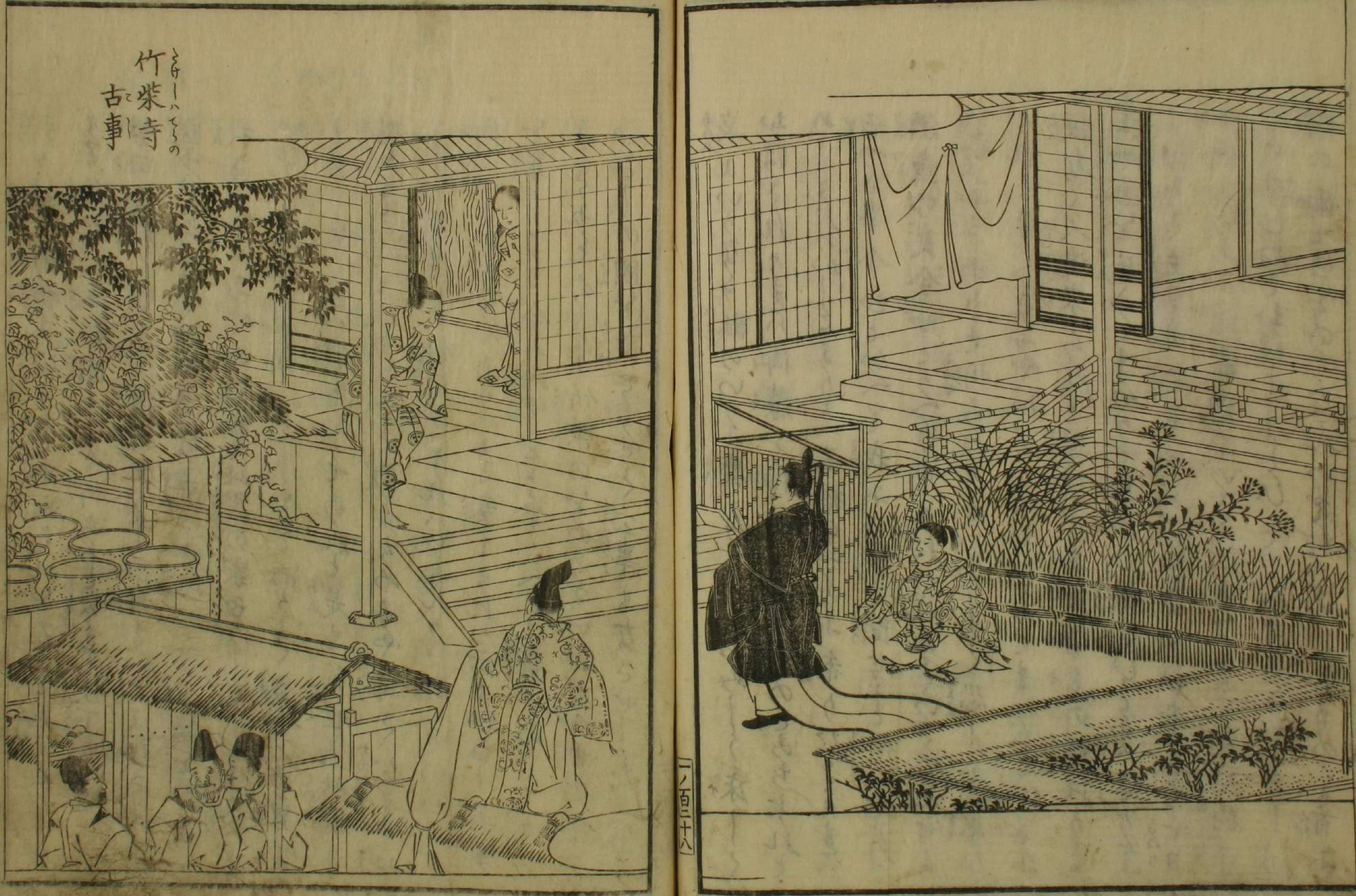
済海寺と同隣の土岐侯の邸中の地其舊跡なり 山岡明阿云按に今の地ハ海辺にして岡の上なれハ更級日記にいへる所にかなへりとも若くハ此寺にてあらハ昔ハ外にありしといひ侍る 後にこの所へうつせしなるへしと云々

更級日記云

今ハ武蔵國になりぬ殊にをかしき所もみえす濱も砂子

白く波もなくこひちの様にて紫生と聞野も蘆荻のみ
高く生て馬に乗て弓もたる末見えぬまで高く生茂りて
中を分行に竹芝といふ寺あり遥にいささやかなる
所に楼の跡礎などあるをいかなる所ぞと問へば是なんいにしへ
竹芝といふさかなり國の人のありけるを火焼家の火
焼衛士にさし奉りたりけるに御前の庭を掃くとて
などや苦しきめをみるらむ我國に七つ三つ造り
居たる酒壺にさし渡したるひたえの瓢の南風吹ば
北に靡き北風吹ば南になびき西吹ば東に靡き東
吹ば西になびくを見てかくてあるよと獨ごちつぶやき
けるを其時の帝の御むすめいみじうかしづかれた
まふ只獨り御簾の際に立出給ひて柱に寄かかりて
御覧ずるにこのをのこかく獨ごちいふを

哀にいかなる瓢のいかに靡くならんといみじうゆかしく
おぼされければ御簾を押明てあのをのこ此方へと
めしければかしこまりて高欄のつらに参りたりければ
云つる事今一度我にいひて聞せよと仰られければ
酒壺の事今一度とかへり申ければ我ゐていきて見せよ
さいふやうありと仰られければかしこく恐しと思ひ
けれどさるべきにやありけんおひ奉りて下るに
便なく人追來らんと思ひて其夜勢多の橋のもと
に此宮を居ゑ奉りて瀬田の橋をひとまを
こぼちて夫を飛越て此宮をかきおひ奉りて七日
七夜といふに武藏國にいきつきにけり帝后御子
うせ給ひぬとおぼしまどひもとめ給ふにむさしの
國の衛士のをのこなんいとかうばしきものを首に


竹柴寺古事

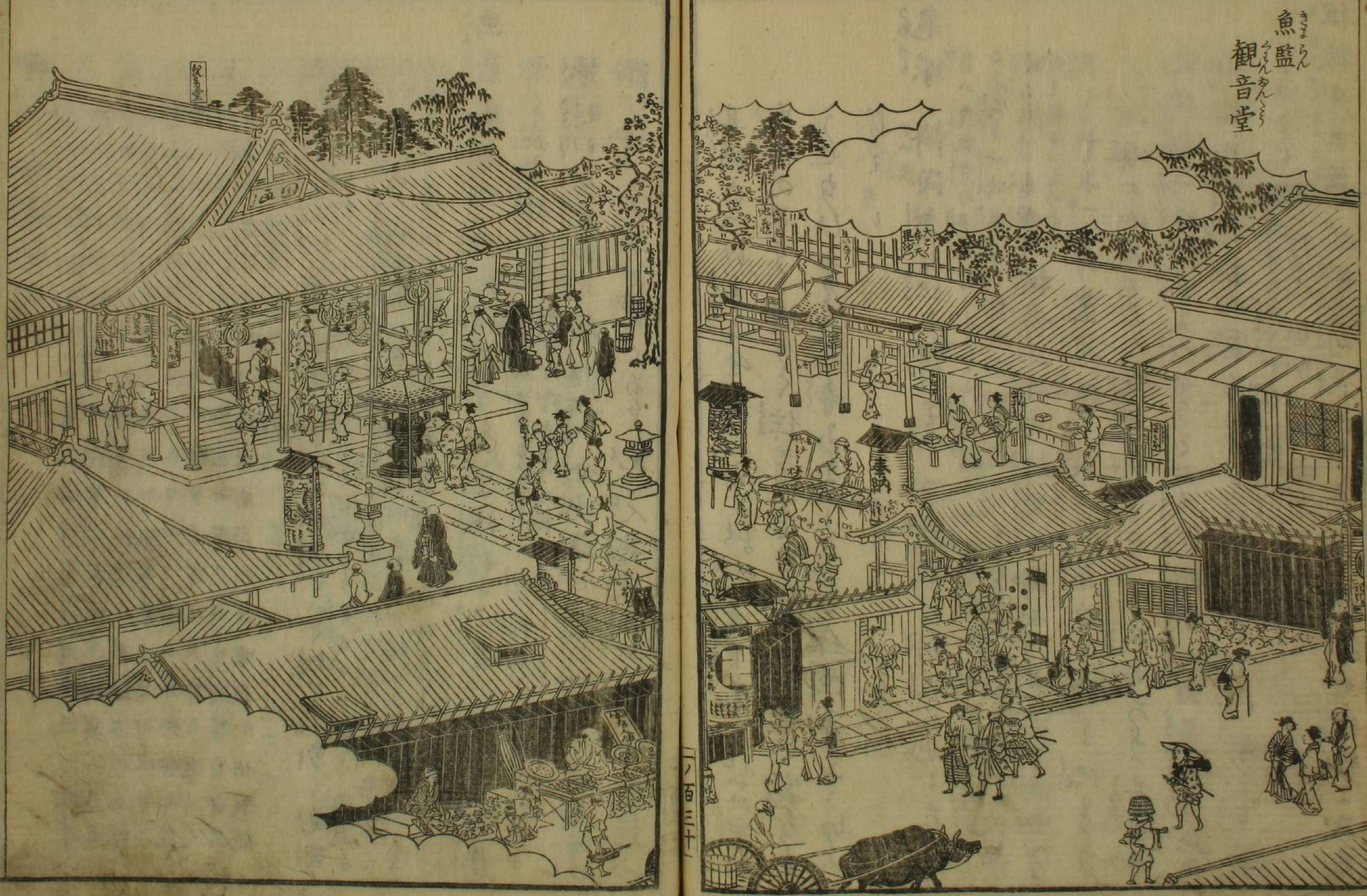
引うけて飛様に逃ぐると申出て此をのこを尋るになりしを
云も論なく本の國にこそ行らめと公よりも使下りて追ふに
勢田の橋こぼたれて得行やらず三月といふにむさしの
國にいきつきて此をのこ故尋るに此御子公使をめしく
我さるべきにやありけん此男の家にゆかしくて行と
いひしかバゐて來りしこそあはれに覺ゆこの男罪
しきらせられバ我もいかであれと是も前世に此國に
跡をたるべき宿世こそありけめはや帰て公に此
よしを奏せよと仰られしかバいかんともなくてのがれく
御門にかくなんありつると奏しければ云ふかひなし其男
を罪しても今ハ此宮をとりかへし都にかへし奉る
べきにもあらず竹柴のをのこにいけらん世の限り
むさしの國を預けとらせて公事もなさせしたゞ宮に

其國あづけ奉らせ賜ひしかバ此家を
内裡のごとく造りて住せまゐらせける家を宮となし
うせたまひければ寺になしけるを竹柴寺といふ
なりと云々

亀塚 済海寺の北に隣て隱岐家の別荘の地にあり 昔ハ竹柴寺の境内なりしを中古開國の頃地を割て隱岐家の別荘になりしかバ此時亀塚ハ隱岐家氏附の内に入りしとぞ其塚のうへに其主の建られし亀塚の碑と称するものあり 相傳ふ往古竹柴の衛士の宅地に酒壺を其ところに一つの靈亀栖て後土人崇めて神に祀まつり そのころにやありけん或時夜もすがら風雨ありて其翌日彼酒壺一堆の石に化せりと云又文明中大田道灌此地に斥候を置其亀の靈あるをもてしくこれを河圖と号す 済海寺の山号を昔ハ亀塚山と唱へしとぞ今も按に土人ハ亀塚の済海寺と呼ぶとぞ

祖徠先生墓 三田寺町長松寺といへる浄家の境内にあり

魚籃(ぎよらん)観音堂(くわんおんだう)



碑文ハ猗蘭侯撰す

嗚呼夫東物先生之墓也嗚呼先生復學於古歸道
郷曾博究物理立言修辭德崇名埀不朽莫大焉鳴
呼先生出也如日之升也乃影之及無所不照其朦
焉鳴呼實出先生天意可知也其爲人其行状弟子
識矣享保戊申正月十九日六十有三卒姓物部茂
卿以字行銘曰洋洋聖謨世用惑久天降文運斯人
云受乃化乃弘徽猷維厚大業已成日新冨有瑕其
不壽天龔斯人匪天維龔有司列辰嘻我小信艱能
孚神盛德不朽永于牖民

先生ハ荻生氏本姓ハ物部名雙松字ハ茂卿字をもて行はる一号ハ蘐園通称ハ惣右衛門と云父ハ方庵と号して官医たり先生父に從て南總に住る五歳にして文字を識十五歳よく文を属す家極て貧しく東都に出て力学し業成て柳澤侯の挙するに遇ひ食禄五百石を賜はり編修惣裁とする享保十三年戊申正月十九日に卒す著述の書八十餘部といふ

魚籃観音堂　同所浄閑寺といへる浄刹に安置し本尊ハ木像丈け六寸計あり　面相唐女のことくにして右の御手に魚籃を携へ左の御手ハ天衣を持したまへり　縁起曰唐元和年間　憲宗の年号なり　金沙灘といへる地に一人の美婦の籃を持して魚を鬻くあり見る人其容貌の麗しきを競ふ

女の云く我性佛経を悦ふ若是を通せむ人あらハ夫とせんと云其中に馬氏なる人ありて是をよくそらんじ依て此女をむかへけるに程なく死せり馬氏悲みに堪ず日を経て後異僧来りて馬氏と共に塚をひらくに霊骨ことごとく金鎖となりて光を放つ是より其國こぞりて三寶を崇めけるとなむ　初金沙灘に應化ましまし妙相をあらハして魚籃観音と号けたてまつる　爰に當寺の開山称誉上人自の師法誉上人肥州長崎に遊化の頃一老婦より此霊像を感得し元和三年丁巳豊前國中津といへる地に假に浄舎を営て御座を構へて魚籃院と号ス竟に寛永七年庚午三田の地に奉安せしを称誉上人其地の所せまきを歎き承應元年壬辰正に今の地に移し當寺を建立す尓より緇素おしなへて渇仰し衆人打群て歩を運ぶよりて霊應いちじるし香煙常に風に靡き梵唄うたた林りこゝふ

潮見坂

潮見坂 聖坂の南伊皿子臺町より田町九丁目へ下る坂をいふ
或人云潮見坂旧名ハ潮見崎と呼よりしほみといふ古ハ此辺に七崎あり
しと云 按に潮見崎月岬袖ヶ崎大崎荒藺崎千代ヶ崎長南ヶ崎是等を
合せて七崎といひしか

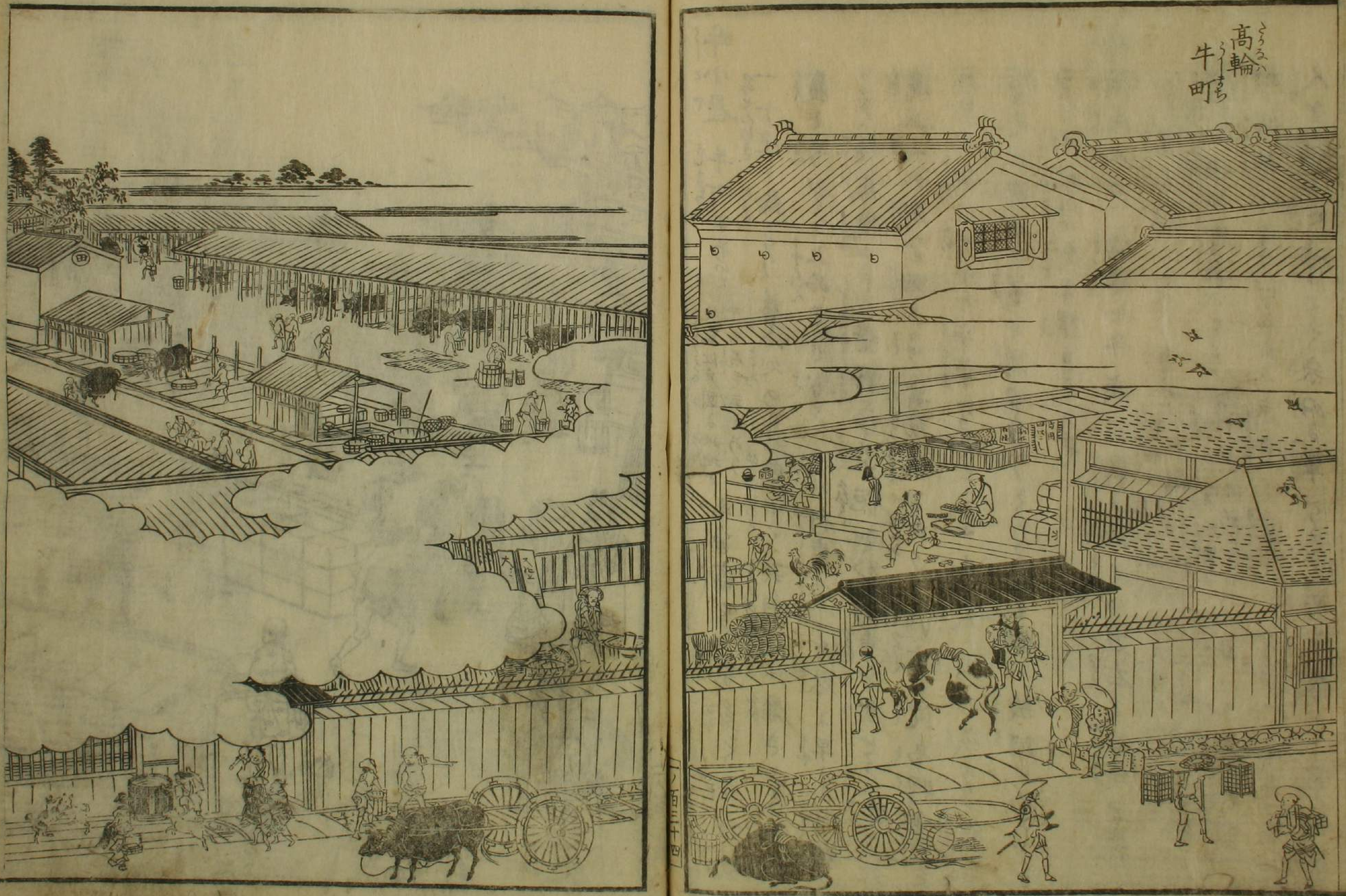
伊皿子薬師堂 潮見坂より高輪へ下る坂の左側にあり寺を醫
王山福昌寺と号す天台宗城琳寺に属す 本尊薬師佛の像ハ智證大
師の作にして右大将頼朝卿の念持佛なりしとぞ往古相州
鎌倉の佐介谷にありて薬師堂といふ其のち騒乱の時住僧護
持して當國品川の地に移しまゐる今の御殿山の地なり 終に寛永年間
今の地に安置すといふ 今鎌倉佐介谷に薬師堂跡と字する地あり其旧跡なりとぞ

東鑑曰
建保六年戊寅十二月二日庚子右京兆依靈夢所
令草創給之大倉新御堂安置薬師如来像雲慶奉造之
今日被遂供養導師荘厳房律師行勇咒願圓如房
阿闍梨遍曜堂達頼覺房良喜若宮供僧也施主並室家
等坐簾中
按に東鑑にある此薬師佛を運慶の作とし寺傳ハ智證大師とす又東鑑に右
京兆とあるハ北条右京太夫義時のことなるべし

伊皿子薬師堂

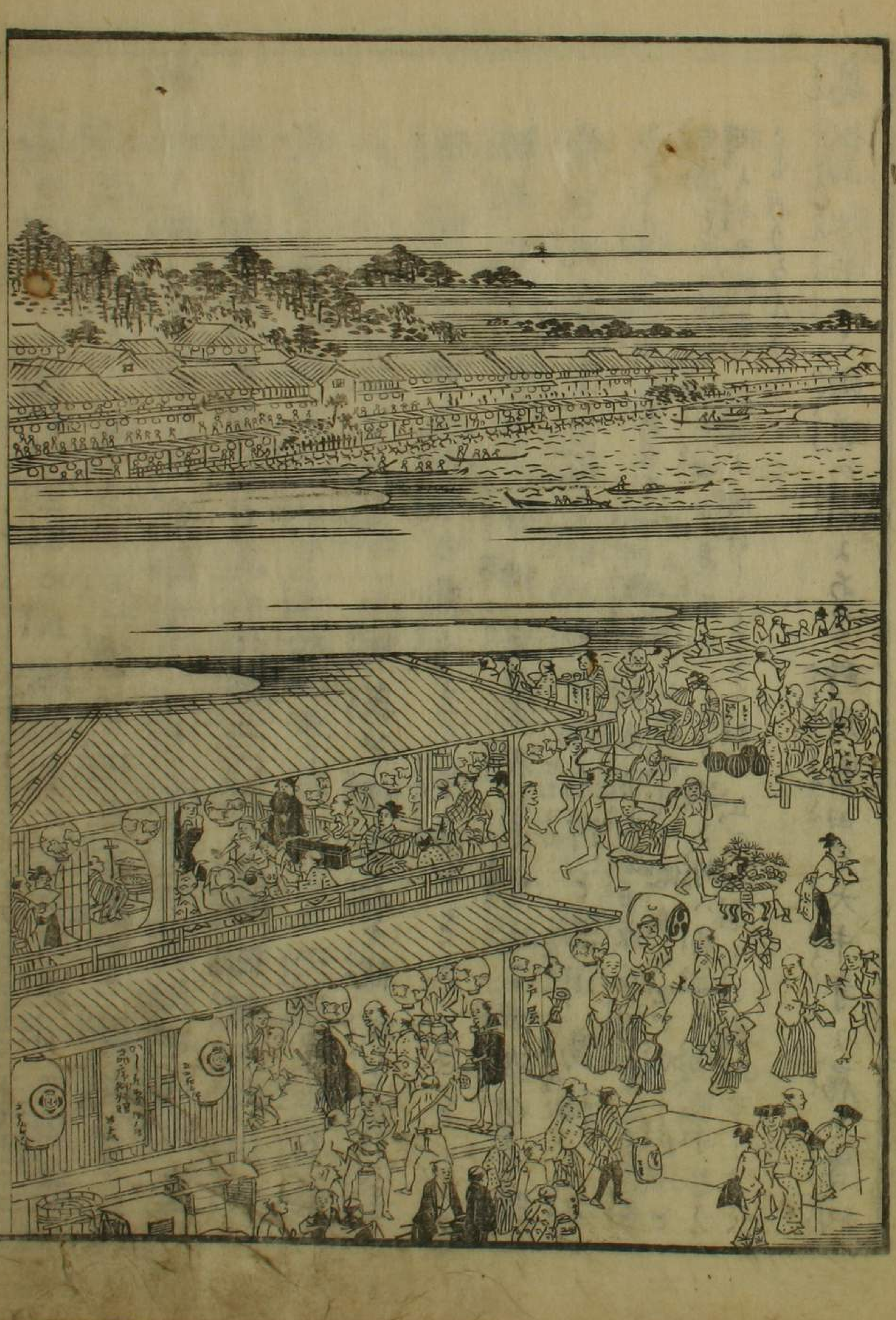
牛小屋　牛町にあり　延宝江戸図に此地を牛の尻と云とあり　牛を畜ふる家多く牛の數一千疋に餘れり養ふ処の牛額小く其角後に靡きたるを藪囊と号けて上品なりとす都にて牛ハ行事正しく殊に早し形婉にして精氣撓す力量勝れたれバ軛をかけ重を乗せて遠きに運ふ人の用を助くる其功誠に少からず古ハ淀鳥羽にのミありて都の外にハ牛車なかりしに御入國の頃より許宥ありて江府にも是を用ひらるゝとなれども餘ハ駿河にあるのミにて唯此三ケ所に限れりとぞ

高輪大木戸　宝永七年庚寅新に海道の左右に石垣を築せられ高札場となし給ふ　其初ハ同所田町四丁目の三辻にありしを今も彼地を元札の辻と唱ふ　此地ハ江戸の喉口なれバあり　細田町より品川迄の間を海岸といふ　七軒と云辺ハ酒旗肉肆海亭をまうけられハ京登ハ東下り伊勢參宮等の旅人を餞り迎ふるとて来ぬる輩ここに宴を催し常に繁


高輪牛町

高輪大木戸

緑海旋郊関高阡
上路間早朝平吐
日残霧半含山遠
近征帆出東西驛
馬班長安從此去
萬里幾人還
南郭



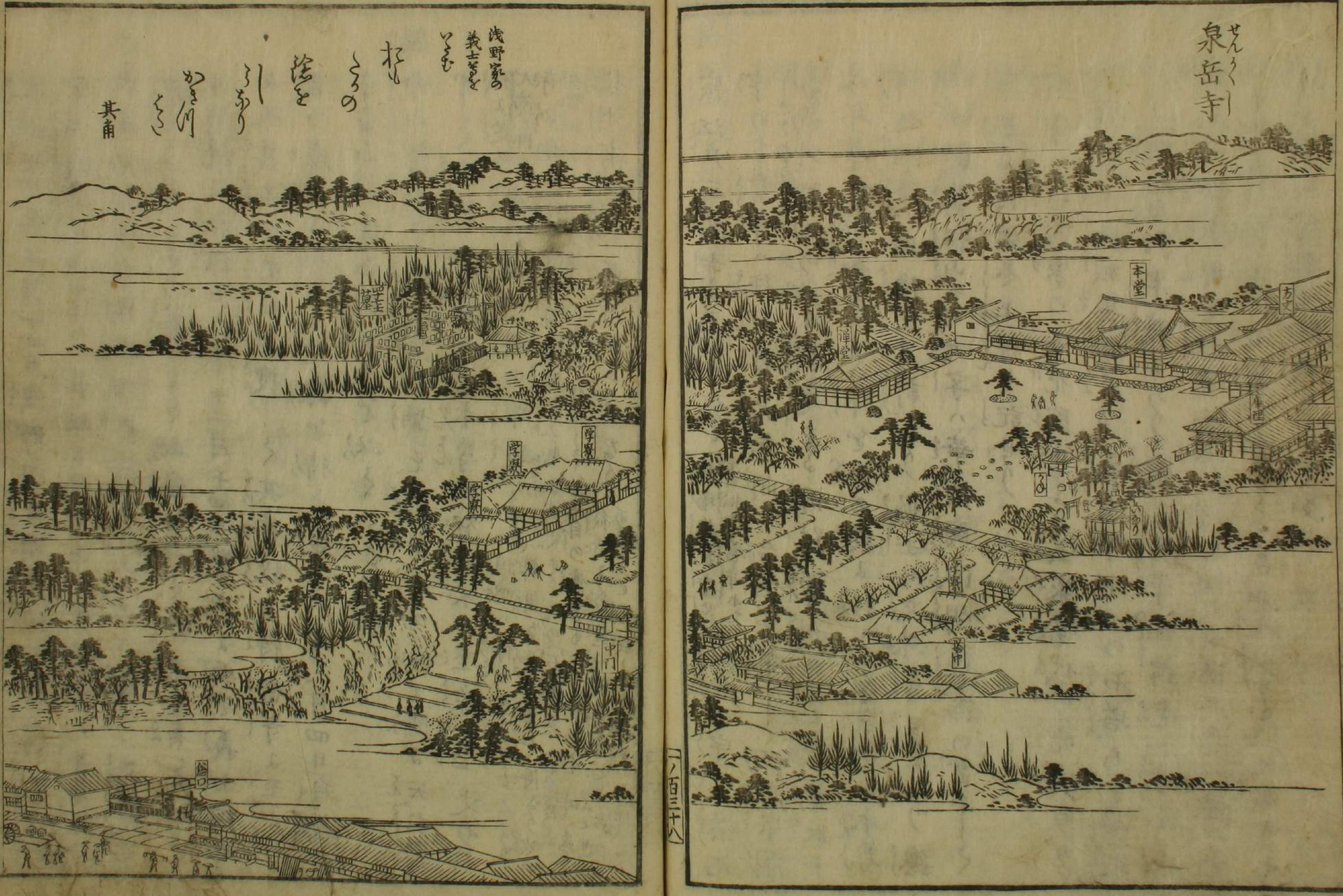
高輪海邊
七月二十六夜待

昌の地なりし後ゆゑ三田の丘綿〻とし前ゟ品川の海遥に
開け渚に寄る浦浪の真砂を洗ふ光景も最興あり

高輪ヶ原　里老云く白金臺及び二本榎品川臺大井村抔ふ
辺り迄の惣称なりとぞ　異本北條五代記ニ上杉修理太夫朝興
武州江戸の城ニ居住ゑ大永四年正月十三日小田原北条家
よりも二万餘騎を引卒し朝興を攻んためニ彼地を發向せ
らる稲毛六郷の上杉の家人より早馬をもつて急を告る
朝興ハ俄の事なれバ軍評定ニも及バず中途ニ出迎ひ戦ひ勝
負を決せんと討て出小田原の先陣と品川高輪ヶ原
ニて渡り合とあるも　小田原記ニ永禄信玄小田原を攻むとて北条下ニ一手ハ江戸品川の縄嶋の辺を焼て民屋を追捕もとあり又江戸咄ニ高縄手とあり然る時ハ高縄ハ高縄手なり
按ずるニ今の海道ハ後世ニ開けしものなく古へハ丘の上通りを通路せしなれバ
さもありなん

萬松山泉岳寺　海道の右ニあり　野州冨田の大中寺ニ属す曹洞

宗　江戸三箇寺の一員なり　橋場總泉寺芝青松寺當寺是也　坊舎三宇学寮九
宇あり　當寺ハ往古慶長年間　台命を奉じて門庵宗關
和尚外櫻田の地ニ創建せる所なりしも後寛永十
八年辛巳再命ありて寺を今の地ニ移したりとぞ　本尊
釋迦如来ハ座像二尺計あり　脇士ハ文珠普賢なり　總
門の額　萬松山の三大字ハ華僧闍沙門道霈の書なりて
康熙辛酉孟冬上浣と記せり
當寺ハ浅野家の香花院なりて其家累代の兆域あり
又浅野内匠頭長矩及び義士四十七人の石塔あり方丈
より南の丘の半腹ニあり　傍ニ當寺住僧建る所の石
碑あり其旨趣を注せり　二月三月の四日及び正月七月の十
六日等ハ英名を追慕して来り集ふ人少からず　又當寺ニ
義士等の遺物を収蔵せる事多し

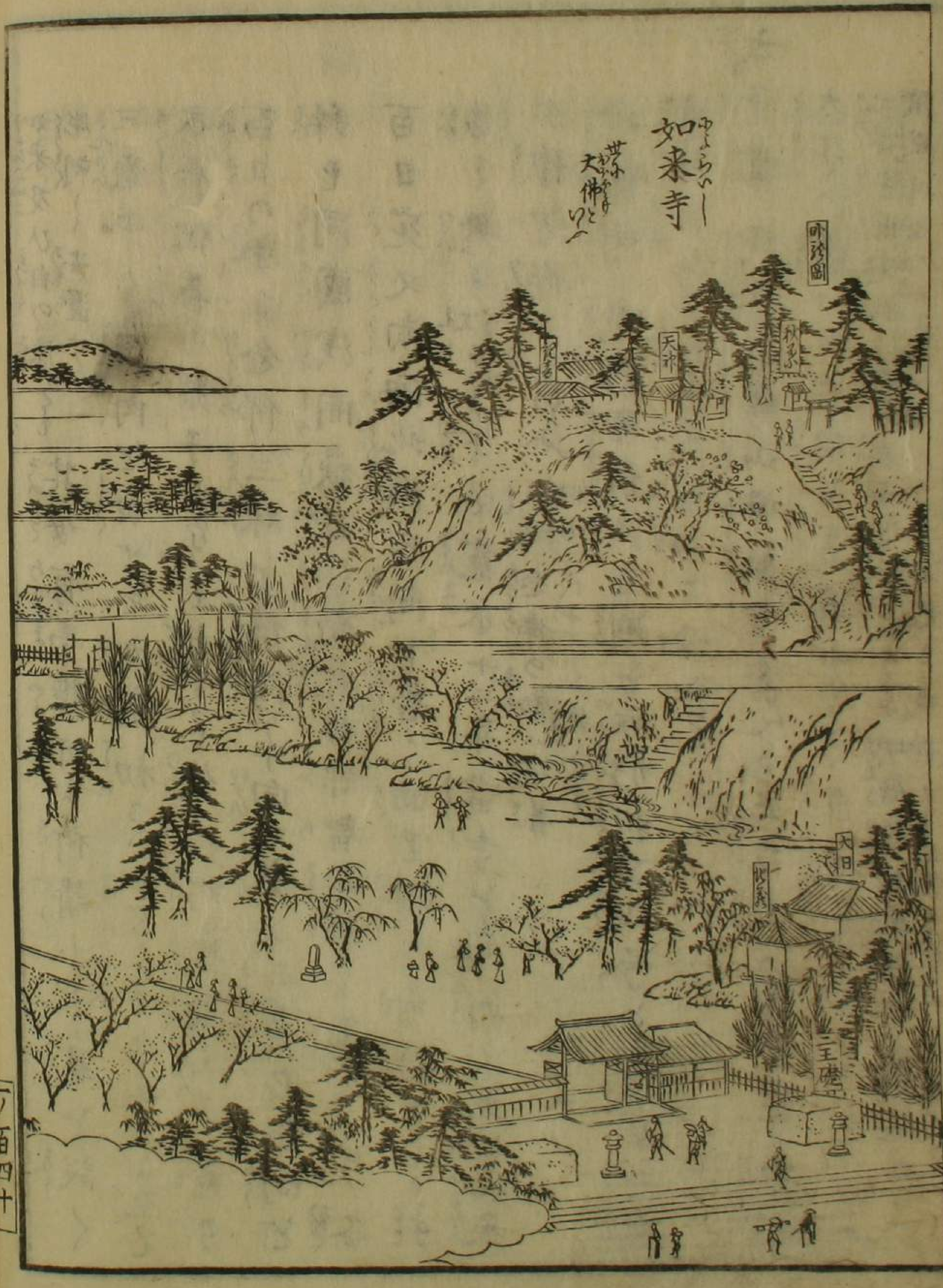

せんがくじ
泉岳寺
浅野家の義士墓をいたむ
松もころの塩をしらありかき川ちき
其角
本堂
学寮
中門

元禄十四年三月十四日浅野内匠頭長矩吉良上野介義英を刄傷に及ぶによりて長矩は死をたまふ後其家の長臣大石内蔵助良雄本國播州赤穂に在て君の讐は共に天を戴べからずと云の義によりて血盟を以て同志の者をかたらひ終に元禄十五年十二月十四日讐家に至て義士四十七人義英の所在を捜して其首級を得當寺に至て亡君の墓前に祭るの後誅を待て翌十六年二月四日自殺せしむるは諸書に詳なるを以てこゝに省く

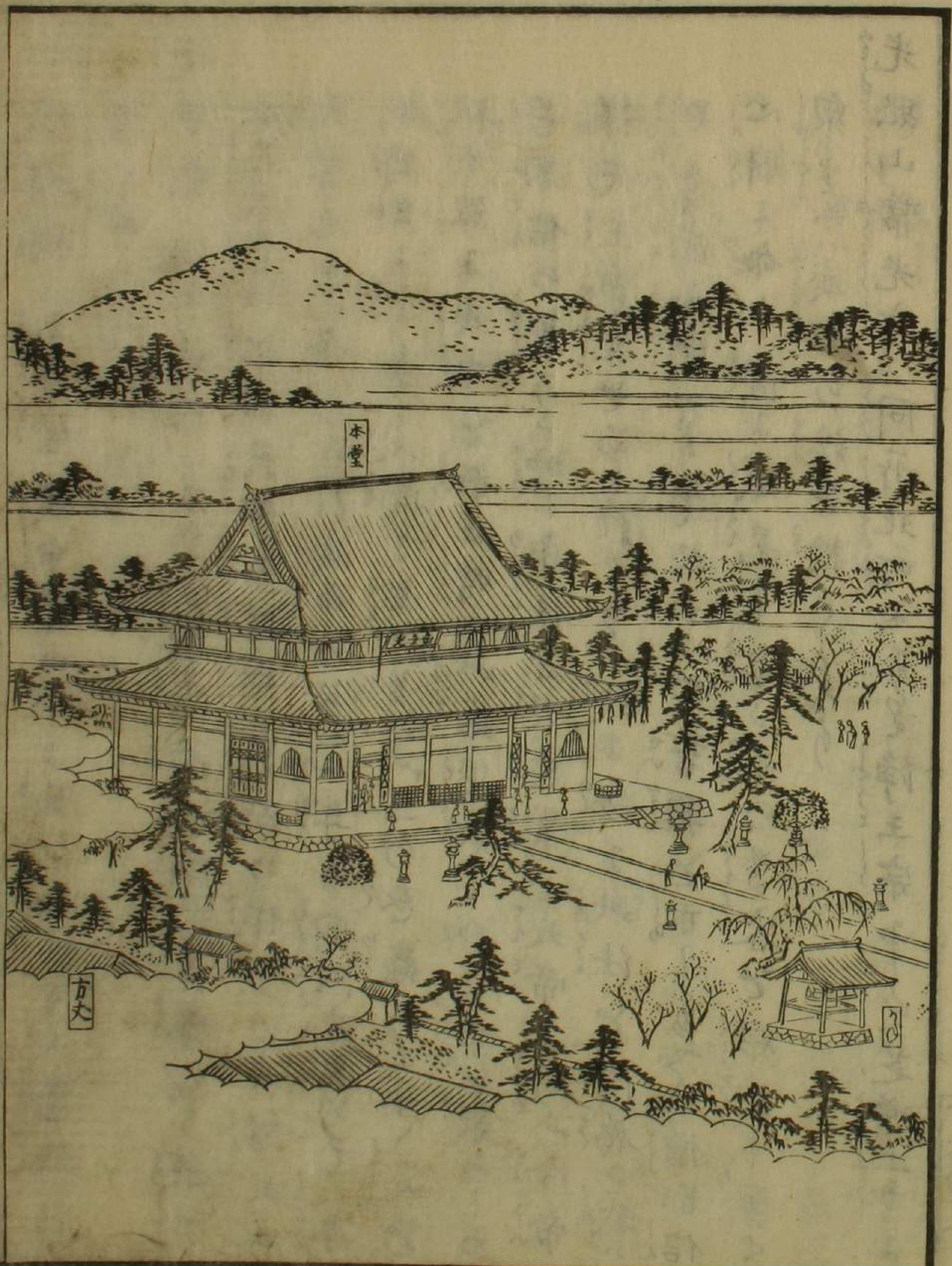
歸命山如来寺 大日院と號す泉岳寺の南に隣る天台宗にして東叡山に属せり本尊五智如来は八座像各一丈あまり俗に芝の大佛と称を奇妙佛と号せり木食但唱師の彫造なり京都鳴滝の五智山に安置する五智如来十三佛等ハ但唱の作にして并に自の像をも作りおけり 但唱ハ佛工にしてことより佛躰を作るに妙を得たり故に所々の石像の但唱多し 摂州有馬郡高須村の産なり彼所に霊亀山興勝寺と云古刹ありしを再興して釈迦如来及ひ自の像をも彫刻し安置せり 其母有馬薬師に祈請して是を設く三歳にして肉を食せず九歳初て出家す年十五に至て木食但善の弟子となる夫よりて後信州檀特山に籠り百日の中に念佛三昧を修得し向の峯に三尊の影向を拝す同國浅間嶽及ひ南紀の那智山等に籠る事各百日宛又南海北溟の間を普く回て諸の奇特をなす事多し終に江戸に下て寛永十二年當寺を開創し五智如来の像を作るといふ 三時念佛の勤ハ但善但唱二代にして絶えり

臥龍岡 境内堂前北の岡を云形状を以号とす上に天満宮の祠あるゆへ天神山と唱へり

太子堂 同所旭曜山常照寺といへる天台宗の寺にあり聖徳太子の像ハ十六歳の御容にして自作なりといふ 元禄年間板の江戸鹿子といへるに此所に安置しすとあり 明暦年間越後守光長卿の陪臣川木八兵衛某故ありて



如来寺
世俗大佛といふ
天神
大日

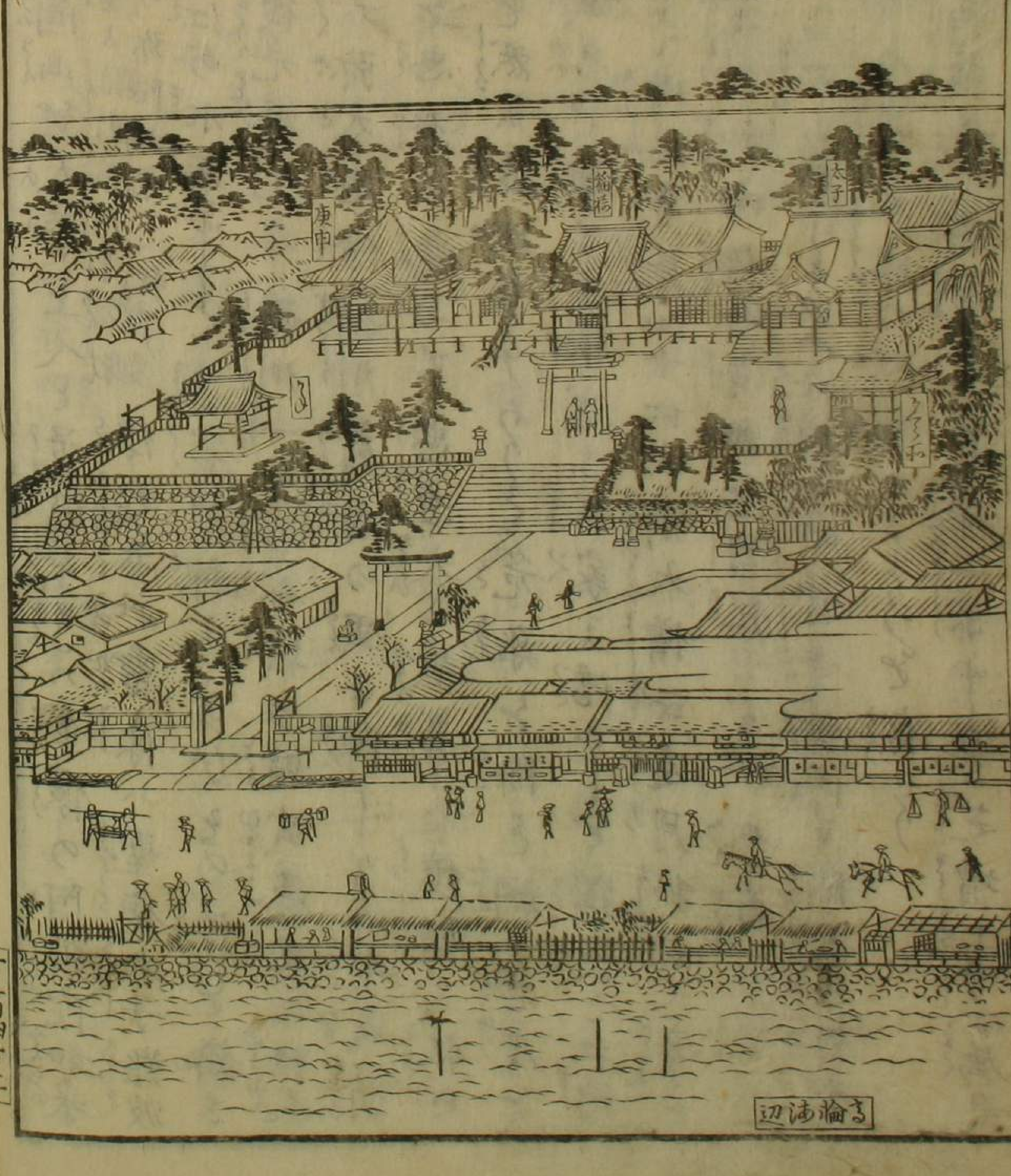


本堂
方丈

稲荷祠　太子堂　庚申堂の中に並ひ立せり　高輪の
産土神なり
庚申堂　同し境内にあり本尊は青面金剛の木像なり　摂州
四天王寺の住侶民部卿僧都豪範の作といふ　縁起云
大宝元年辛丑正月庚申の日より一年の間に六度ありて八専
の間日に中り人間に三尸といふ三の悪虫ありて災を
招く然るに庚申を祭る時は此虫退散し身に幸を来らしめ
若不信の輩ある時は命根を吸悪業を天帝に訴ふ今帝
釈天王衆生をあはれみ給ふ故に汝に此法を附属す我は
則青面金剛なりと又十二の誓願を示し給へり僧都信
心肝に銘し直に感見しける所の尊容を彫刻し普く
衆生に庚申の法を授くとなり
光照山常光寺　同所北町にあり浄土宗にして芝増上寺に

属す開山を大誉上人と号す本尊は金像の阿弥陀如来
なり　世に信州善光寺分身の弥陀如来と称す　縁起云此霊像は聖徳太子難波
の堀江の水面より出し尊容を拝し給ひその像を鋳さ
しむ後元暦元年播州一の谷合戦の時武蔵国の住人
岡部六弥太忠澄摂州蘆屋の里に陣しける時或翁
此像を忠澄に受与す忠澄大に歓喜し鎧櫃に収め
出陣す然るに霊威のいちじるく危難を除き剰へ忠度を
討て武名を顕せり依て代々其家に伝へしを独夜と云僧
故ありて増上寺第四十六世前大僧正定月和尚へ奉る
遂に定月和尚件の旨趣を自記し給ひ本尊と共に
当寺に収られしとぞ此故にや当寺境内に岡部六弥太の
墓と呼ふ古き石塔の破壊せるものを存せり
珠玉山宝蔵寺　同所にあり浄土宗にして芝増上寺に属す

太子堂
稲荷社
庚申堂



高輪海辺

常光寺

開山ハ順清法印と号ス往古ハ慈覚大師開創の梵刹にして天台宗なりしとぞその頃より今の宗風に轉して七世忍空甚光勅上人慧順和尚中興をなす阿弥陀如来の像ハ善導大師の作にして御手に宝珠を持したまふ故に世俗宝珠阿弥陀如来と称す（本尊の背面に永隆元年十一月十七日彫刻と鐫）と伝ふ

子安観世音　當寺に安す画像にして延喜帝の宸筆なりと云　縁起一巻あり（画縁起ハ土佐光信と云　略縁起ハ和田義盛撰ぶ所といふ）

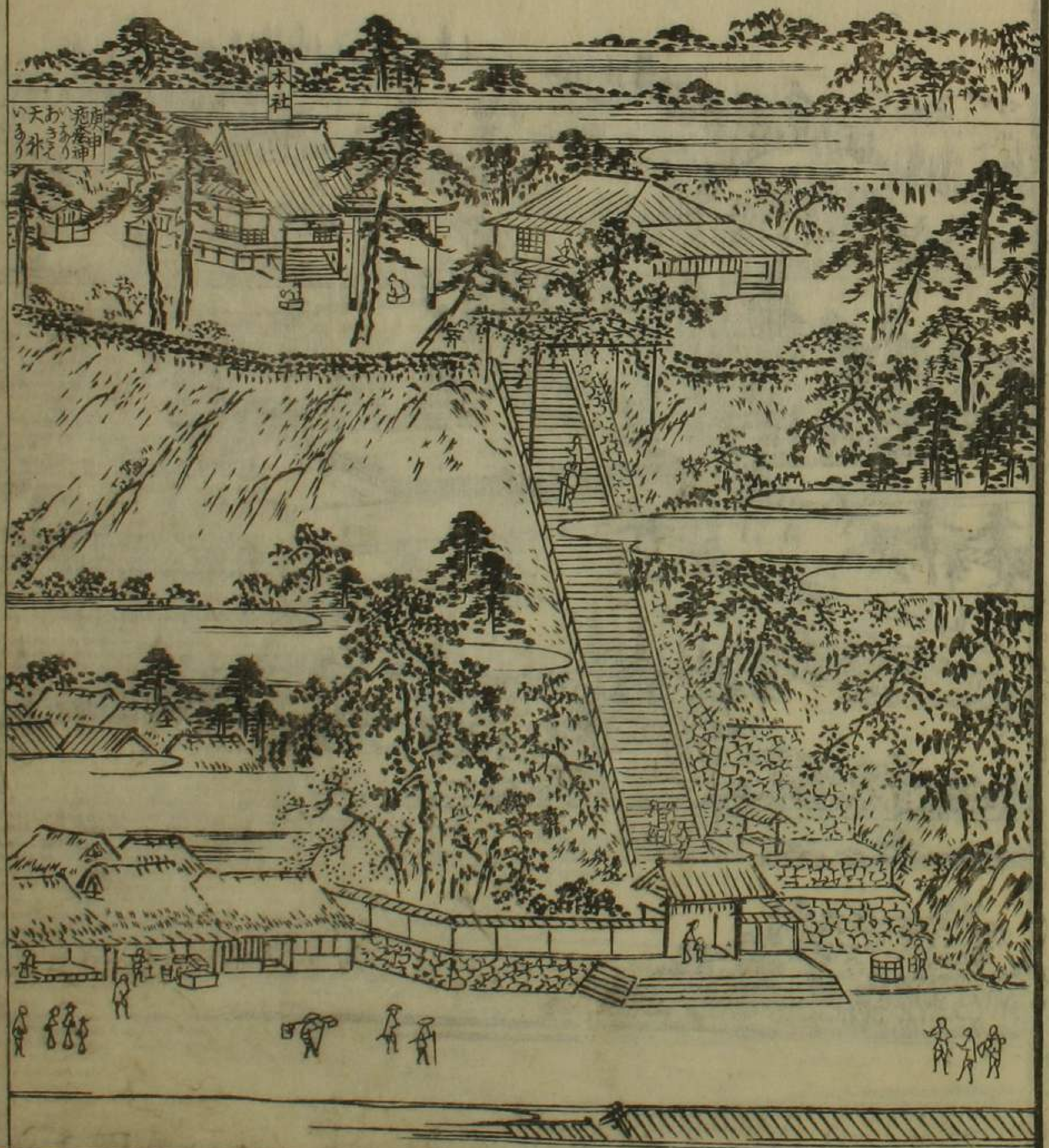
縁起略に云　建久元年十一月右大将頼朝卿上洛の其途中一人の婦ありて告て云く此霊像ハ梁武帝未皇太子ましませし時常に観音を祈念したまふ或時此霊像を感得なしたまひしに程なく太子降誕ましませり昭明太子是なり其後此霊像本朝に渡りしに

石神社

縁遠き婦人當社に詣て良縁を祈れハ必験ありとかや　報賽にハ社地に何にも限らず樹木を栽ることを習俗とせり

又相伝ふ石皷をまつるといふ

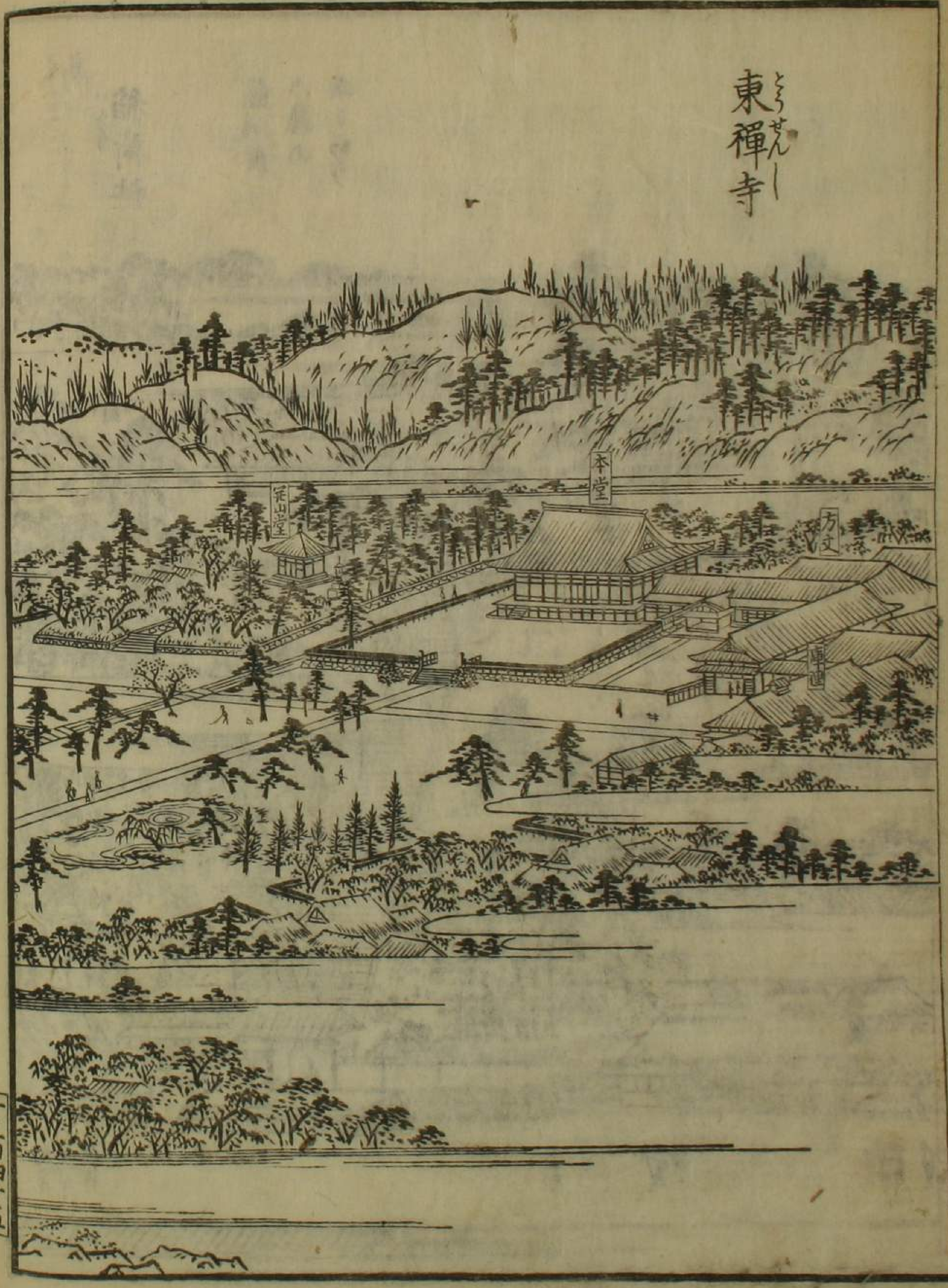
高山稲荷社
薩州侯の藩の南にあり



欽明天皇御崇敬あり又　醍醐天皇も尊信なりしかハ宸翰を注き縁起を作らせられしことを将軍にさゝふとなり頼朝卿これを得たまひ鎌倉に安置し奉る信誠ふかさるところ其頃和田左衛門尉義盛再縁起を書添ふかしとかり此霊像鎌倉兵乱の後當寺に遷し奉りしをそのまゝ

辨財天　慈覚大師江州竹生島に詣てたまひし頃海中波間に影現ありし宇賀神の形を摸擬し御長七寸三分に彫刻なしたまひしを當寺に安置しまするとなり

石神社　同所高輪南町鹿児島久留米両侯の間の小路を入て西の方二丁斗にあり祭神詳ならす同所天台宗安泰寺の持なり昔ハ遮軍神に作るよしあり寄願ある者成就の後ハ必何によらす樹木を携へ来り社地に栽る


とうぜんじ
東禪寺
本堂
開山堂
方丈

塔中
塔中
天神
経堂
山門
八まん

賽をとりふ此地を石神横町と字するハ此社あるゆゑなるべし土人誤りてしやもじ横町と唱ふ

佛日山東禪寺 同所高輪中町にあり 妙心派の禪宗 江戸四箇寺の一なり 本尊ハ釋迦如来 開山ハ嶺南和尚と号す 宝鑑國師と諡を 和尚ハ日向國飫肥の人 守永氏 肥前守祐良の五男なるを幼より佛門に入て後宗門の大德となる 寛永二十年癸未七月廿七日寂を 歳六十二 慶長の頃江戸に来り阿左布に一宇を闢く 當寺是なるを 其地を今靈南坂と云 寛永年間今の地に移さる 総門ハ海に臨む 此門の額 海上禪林の四大字ハ朝鮮國雪峯の筆なり 頗る世に称せり

宝鑑録云
敕諡大夫法鑑禪師嶺南和尚大心中興主盟東禪
開闢始祖得法洛西之地搩轉向上機關盛化海東
之邊云云

有喜壽八幡宮 寺外右の方にあり 安泰寺奉祀す

此地を有喜壽の森と号く 或人云古へ老樹の柊一株ありて鵜の群りしかハ鵜樹巣ともかくといへり

谷山

今云所ハ品川の入口にありて海に臨む丘をさしていふ しかいへるを昔ハ大日山と号けるとぞ 紫の一本とよめる草帋に昔此地に出崎ありしとも或ハ 諸侯八人の第宅ありし故やつ唱ふるといへども証とするにたらず 谷山ハ邑名にして目黒の南より袖ヶ崎仙臺侯別荘の地の辺へかけて都て谷山村なれハ此地に限る号にあらず 大日山とよびしハ昔此地に石像の大日如来立せおハし故ありとぞ 後世其堂宇破壞せし頃谷山稲荷の地にうつし又品川北馬場の光嚴寺へ収むるといへど今ハ其石像の所在をしらす

江戸名所圖會天樞下終